幼馴染転生　― ルディと一緒に本気だす ―

文頼

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

３４歳ＯＬの所帯持ちの女性は、ある日夫のトラックで帰宅途中、夫が突然倒れ制御の効かないトラックでコンクリートの壁に突っ込み死んだ。目覚めた時、彼女は赤ん坊になっていた。どうやら『無職転生』の世界に来たらしい。

彼女は誓う、今度こそルディと共に悔いのない人生を送ると。

目次

第1章　幼少期

プロローグ ―――――― 1

第一話「もしかして：無職転生」 6

第二話「困惑するメイドさん」 14

第三話「魔術理論」 ―――――― 19

第四話「対策」 ―――――― 26

第五話「魔術」 ―――――― 33

第六話「夢」 ―――――― 38

第七話「友達」 ―――――― 46

第八話「ターニングポイント」 56

第九話「町」― 裏 ―――――― 62

第2章　少年期　入学編

第十話「伸び悩み」 ―――――― 72

第十一話「冒険者ギルド」― 裏 ―――――― 84

第十二話「未来」 ―――――― 96

第十三話「推薦状」― 裏 ―――――― 102

第十四話「転移」 ―――――― 112

第十五話「入試」― 裏 ―――――― 119

第十六話「迷宮」 ―――――― 123

第十七話「入学初日」― 裏 ―――――

133
第十八話「魔眼」――――138
第十九話「龍神」―裏―147
第二十話「帰郷」――――154
第二十一話「再会」―裏―166
第二十二話「傘下」――――176
第二十三話「安堵」―裏―182

第1章　幼少期

プロローグ

私は３４歳のＯＬ。
夫と子供を持つ、ごく普通の女だ。
今日は何でもない、本当に何でもない日のはずだった。
朝起きて、夫の弁当と朝食を作り家族三人で食事をして、洗濯物を干して、仕事に行って、帰りに付き合いで同僚と飲んでいた。
同僚と何気ない会話をしていると、ぽつぽつと雨が降ってきた。
同僚はベランダに洗濯物を干していたようで、支払いだけして焦って帰っていった。
私は雨が降る事を天気予報で確認していたので、今日は部屋干しだ。
だが、詰めが甘い。
傘を持ってきていなかった。
夫に電話をすると、丁度近くまで仕事で来ているという。
丁度良かったと、トラックに乗せてもらう事にした。

夏から秋へと季節が移り変わろうとしているせいか、
ここ最近安定していた天候が一気に酷くなった。
助手席からぼうっと雨を眺めていると、あの日の事を思い出す。

――――

その日の私は雨で部活が休みになり、延々と進まない勉強に嫌気が差し、
窓の外の雨景色をぼうっと眺めていた。
――ピロンッという軽快な音が、私にメッセージが送られてきたことを教えてくれる。
携帯を見れば、どうやら情報網が無駄に広い部活仲間が、
何やらグループのチャットに画像を載せたようだ。
当然勉強の続きなどやる気のない私は、そのメッセージアプリを開いた。
気づいたら雨の中、家を飛び出していた。
そして、自宅の向かい側にある家の玄関前に立っていた。
服装は部屋着にサンダルという、今時の女子高生では考えられない姿である。
それでも、そんなことを考える余裕がない程、私は必死になっていた。
右手の携帯に映るのは、同年代の少年が全裸で校門に磔にされている写真。

それが知らない少年だったなら、
その画像を貼った部活仲間に、一言二言苦言をいっておしまいだっただろう。
「××……」
でも、知っていた。
私はその少年の事を、多分誰よりも知っていた。
画像に載っていた少年は、幼い頃からの付き合いで、幼馴染だった。
高校に進学してからぱったり会わなくなったが、
その画像を見た時、すぐに幼馴染だと気づいた。
それから何度も彼の家に行ったが、結局彼を立ち直らせることはできなかった。
それでも、生きているだけマシだと思った。
私が彼の立場だったとしたら、きっと、自殺していただろうから。

そこで、意識を浮上させる。
何か違和感を感じる。
そうだ、夫が静かなのだ。

彼は静かな空気が嫌いで、いつも話しているくらいだというのに。
仕事で疲れているのかなと思い、彼の方へ振り向く。
「■■……？　ちょっと、大丈夫!?」
夫がハンドルに突っ伏していて動かない。
そういえば彼は最近身体が不調だと言っていた。
でも大丈夫だろうと笑っていた。――そんなものは医者にしか分からないのに。
急いで車を止めようとするが、筋肉質で重い夫が邪魔でブレーキを踏むことができない。
ふと進行方向を見ると、若い男女が言い争いをしているのが見えた。
――間に合わないっ！
このままではあの男女にぶつかり、そのままコンクリートの壁に突っ込むだろう。
視界が急激に色を失い、衝突までの時間が遅く、長く流れる。
一人の少年が突っ込んでくるトラックに気づき、少女引き寄せた。
だが、もう一人の少年はこちらに背中を向けて、気づかない。
その時、トラックの車線上に男が飛び出してきた。
その姿を見て、すぐに誰か気がついたのは、さっきまで彼の事を考えていたからだろう。

以前より随分とだらしがない様相で、更に太った幼馴染は、
気づいていない少年を車線上から引っ張り出した勢いをそのまま、車線上に入った。
一瞬だけ、何かが光った気がした。
しかしそれが何かを考える暇もなく、トラックに衝撃が奔った。
幼馴染がまるで人形の様に吹き飛ばされ転がっていき、前方のコンクリートの壁に叩きつけられる。
そのコンクリートの壁は、トラックの車線上。
私は運命を呪いながら、高速で幼馴染の倒れるコンクリートの壁にぶつかり死んだ。

第一話「もしかして：無職転生」

「――・・・――」

遠くで赤ちゃんの泣き声が聞こえる。

私が子供を産んだ時に聴いた、まだ生まれて間もない声だ。

……おかしい。

私は寝起きだけは昔からいいはずなのに、全然意識が覚めない。

――いや、そうじゃない。

私は夫の運転していたトラックでおもいっきり事故ったのだ。

あれほどの速度が出ていたら、生半可な怪我では済まないはず。

（じゃあ、意識がはっきりしないのは、事故の後遺症？）

瞼も開かなければ、体の感覚すらない。

状態から察するに、全身打撲、全身麻痺、脳挫傷といったところか。

赤ちゃんのように泣き散らかせればどれだけよかったか。

こんな体では私は泣くこともできない。

それ以前に、夫は大丈夫なのだろうか。

もし私と同じように、一生涯に残る大怪我をしてしまっているのなら、
――には、本当に申し訳ない。
幸い私の両親は元気なので、生活は何とかなるだろう。
両親が居ない寂しさはどうすることもできないが、
真面に生きてくれることを祈る。
お母さんお父さん、五体満足に産んでくれたのに、こんな状態でごめんなさい。
私は最低の親不孝者だ。
（……そういえば、幼馴染があの時い、た？　ぁあああっ）
思い出される事故の瞬間――
吹き飛ばされ、轢かれる幼馴染を思い出し、更に絶望に叩きつけられる。
幼馴染は助からなかっただろう。
高速に走るトラックに跳ね飛ばされ、それよりも早くコンクリートに叩きつけられ、
それだけでも重症の怪我を負う大事故なのに、追い打ちをかけるようにトラックで……。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……。
薄れゆく意識の中、私は絶望と後悔に沈みながら何度も何度も謝った。

絶望して散々泣いて、一週間が経った。
どうやら私は生まれ変わっていたらしい。
というのも、初めは全く開かなかった目は麻痺の関係ではなく、
産まれた直後だったから瞼が動かなかっただけで、次の目が覚めた時には自然に目が開いた。
体の方も力が弱く動かしづらいが、感覚もあるし普通に動くようになるのも時間の問題だろう。
私の今生での両親らしき男女にも会った。
その時の私はまだ混乱していたので泣いて心配させてしまったが、
次の日にはしっかりと笑い掛けることができた。
しかし両親の話している言葉は理解できなかった。
私は英語と中国語は大学で覚えたのもあり理解ができるが、そのどちらでもないらしい。
こういう時に使えないのなら、何のために二つの言語を憶えたのか……。

そして最後に、私は双子かもしれない。
今も私の隣には興味津々に私の二の腕を触る赤ん坊がいる。
二卵性か一卵性かは知らない。
生まれたれほやほやの見た目をしているから、何となくそう思った。
しかし私と体の動かしづらさは同じはずなのだが、よくやるなこの赤ん坊。
そんなに触りたいなら自分の二の腕でも触ってろっ！
こちらは仕返しに脇の下をこしょこしょしてやった。
……私の精神は赤子とそんなに変わらないのかもしれない。

一ヶ月の月日が流れた。
この一ヶ月間特に何もできなかったので、ひたすらに言葉を理解することに終始した。
そのおかげで所々言葉は理解できるようになってきたが、
それよりも先に隣の赤ん坊の話をさせて頂きたい。
――なんとこの赤ん坊、生まれ持っての変態だった。

私も隣のコイツも赤ん坊なわけなので、当然食事は母乳を飲むことになる。
だがコイツは、この赤ん坊は、母乳を吸わず、舐めるのだ。
思わず鳥肌が立ってしまうのも仕方がないと思う。
こんな赤ん坊見たことない。というか、母だった身としては、こんなのは居て欲しくない。
私は子供の振りも忘れて思わず二度見をしてしまったが、それほどの衝撃だった。
……兄か弟か知らないけど、将来性犯罪者として名を残さないか心配だ。
他にも色々あるが、考えるとキリがないから止めておこう。
この一ヶ月、言葉を理解することに終始した結果。
両親が話す言葉は随分マイナーな言語だという事が分かった。
まあ地球であったなら、という前提の話だが。
言語に関してそれなりの知識を持っている私から言わせれば、
『メジャーな言語とは別の起源からなる言語』
といったところだろうか。
細かく考えるとそれこそ何日も掛かる。
なのでさらっと頭の中で組み立ててみただけだが、それは分かった。
まあ分かった所でどうしたとなるのがオチなのだが、

この地がメジャーな言語が使われていない程の辺境だと分かればそれでいいだろう。
赤ん坊の頭にも関わらず頭の回転が以前の私と大差ないのに驚きだが、
その代わりすぐ疲れるので今日はもう寝る事にする。
（子供は寝るのが仕事だし……）

半年の月日が流れた。
昼頃で寝ていたルディの顔を弄って遊びながら、私は何となく両親の会話を聞いていた。
「村の北側に魔物が出たらしいから少し行ってくる」
「強そうなら私も行くわよ？」
「いや、アサルトドッグが出たって話だから大丈夫だ。
仮にターミネートボアが居ても俺と村の農家の奴らで何とかなるしな」
その会話の内容に、私は反射的にルディの頬を強く引っ張った。
「あぅあぁうぅあああっ」
「あら、サラが急に泣き出したわ？　おしめかしら」

「ん？　久し振りだな。サラが泣くのも」
「ルディも全然泣かないけどサラも殆ど泣かないわよね」
そういうのはゼニス・グレイラットとパウロ・グレイラット。
ルディは生後半年とはとても思えない非難の目で見てきたが、私はそれどころではなかった。
魔物、魔術、パウロ・グレイラット、ルーデウス・グレイラット、人神、エリス、シルフィエット……。
一つ繋がったら後は芋ずる式にどんどんと物語が繋がっていく。
幼馴染、３４歳、引きこもり、ニート、トラック、転生。
私が昔読んだ小説と、何もかもが一致する。
――もしかしてこの世界、『無職転生』？
私は鈍器で殴られたような衝撃を受けルディの上に倒れ込む。
「――ぐっ」
（……ごめんなさい）
私が昔読んだ小説とこの世界が同じものだとしたら、
ルディは幼馴染で、生まれ変わっていて、
これから波瀾万丈だが、幸せな人生を掴みとっていくのだろう。

（よかった……生まれ変わっててくれて、本当にありがとう）

願わくば、優しくも強い彼に幸せになってほしい。

ただ、それを願うと同時に、これから先に起こる困難について、
私は目を向けなければならなかった。

――多くの読者が魅せられた、美しくも残酷な世界へと。

その後、リーリャが白目をむいているルディと、
ルディの上に乗っかって泣いている私を見つけるのは別の話。

第二話「困惑するメイドさん」

リーリャはグレイラット家で働く侍女だ。
以前はアスラ後宮の近衛侍女だったのだが、実力が足りず、王女を狙った暗殺者に不覚を取り、
結果、剣士としての能力を失い解雇されたのだ。
能力が無くなれば、解雇されるのは当然だ。
リーリャもそれで納得している。
このままアスラ王領に住み続けると、
王女を狙った暗殺者にまた狙われる可能性が高いと判断し、
次の日には王領を出た。
そうして一ヶ月、各々の村を回り、偶々見つけた募集が、
パウロの家の侍女としての仕事だった。
仕事の割に給料が高く、王領とも離れた位置にある。
更には彼とは面識があり、人柄も知っていたのもあり、迷わずブエナ村に訪れた。
パウロは快くリーリャを歓迎してくれた。

奥方のゼニスがもうすぐ出産という事で、焦っていたらしい。

子供が生まれた。
双子だ。
最初に出てきたのは男の子。
次に出てきたのは女の子だ。
後宮でした練習通りの出産だ。
何の問題も無かった。
スムーズにいった。
なのに、生まれた男の子の方は泣かなかった。
そして、女の子は異常な様相で泣き叫んだ。
何か処置に誤りがあったのか。
そう思わざる終えない状態に、冷汗をかいた。
しかし、男の子が顔をしかめると、
「ぎゃぁ、おぎゃあ!!」
何かを訴える様に、一度だけ泣いた。
女の子の方も泣き疲れたのか声が小さくなった。

それを聞いて、リーリャは安心した。
何の根拠もないが、なんとなく大丈夫そうだ、と。

生まれた男の子はルーデウス、女の子はサラスヴァティと名付けられた。
ルーデウスはハイハイができるようになると、家中を移動した。
玄関から、どうやって上ったのか、二階にまで移動していた。
そして必ずと言っていいほど、後ろにサラスヴァティがくっついていた。
仲が良い、と思っていられたのは最初だけだった。

ある日、どうやって移動しているのか見る為に、
私は廊下の四角で二人がどうしているのかを見張った。
しばらくして、ルーデウスが部屋から出てきた。
そしてその後をピッタリとくっついてサラスヴァティがついて行っていた。
どうやらルーデウスが先に歩き回り、
サラスヴァティがその後を着いて行っているようだ。

やはり仲が良い、と、
二人を元の部屋へ戻そうと声をかけようと思った時、
ルーデウスとサラスヴァティがまるで言い争う様に声を発し始めた。
ルーデウスはサラスヴァティを反対方向に体の向きを変えさせ、
普段発している意味のない言葉ではなく、何か言っているように聞こえた。
そしてサラスヴァティが大人しく戻っていくのを見て、またどこかに移動し始めた。
会話していた……？
と、二人が居なくなった廊下でリーリャは呟いた。

一年が過ぎた頃、二人の行動、いやルーデウスの行動は、規則性が出てきた。
ある時から、ルーデウスは二階にあるパウロの書斎に籠る様になった。
書斎の数少ない本を手に取り、ぺらぺらと捲っては、何かをブツブツと呟いていた。
その言葉は少なくとも一般的に使われている言語ではない。
ルーデウスは文字どころか言葉すらまた話せない。
この赤子は本を見て、適当に声を出しているだけだ。
そのはずだ。
そうでなければおかしい。

リーリャはドアの向こうで本を見ているルーデウスから目を離し、
それに比べて、と胸の中で眠るサラスヴァティを見る。
サラスヴァティはここ最近眠ることが極端に多くなった。
それがただ疲れからくる睡眠だったならいい。
だが、半年前よりも眠る時間がだいたい6時間も増えている。
それでも平均的な赤子と比べればそんなに眠る時間に差は無いのだが、
普通は年齢に比例して眠る時間は短くなっていくはずなのである。

リーリャはため息が出そうになるのを堪え、
この色々と規格外の赤子たちを悟った目で見るのだった。

第三話「魔術理論」

ルディが二足歩行ができるようになった。
私は言葉を話せるようになった。

この物語の世界を知っている身として、
まず考えなければいけない事を整理した。
最重要なのが人神対策なのだが、
如何せん『無職転生』を読んだのが昔過ぎた。
ここら辺の領地転移事件なんかの大きなポイントは憶えているが、
細かい話は殆ど思い出せていない。
そしてそれ以前に、私はこの話を最後まで読んでいない。
最後に読んだのは今世を合わせなくても十年以上前で、
あれ、何処まで読んだっけ……。

とまあ、一体何処まで読んだのか思い出せないほどだ。
幸いネットを見ていた時に、
色々素敵なネタバレを知ってしまっているので、
問題は無い、と思う。
何故漫画や小説を読まない私がこの小説を知っているのかというと、
前世のルディが引きこもっていたのを何とかしようと、
私も色々ラノベなるものを読んで勉強していた時に、この小説を発見したからだ。
それが想像以上に面白くてつい読み耽ってしまったのだ。
……本懐は遂げられなかったが、それが今役に立っていると思うと、
あの頃の健気な私を誉めてあげたい。
……想像以上にこの物語にのめり込みすぎて、
一時期、休日とか暇な時間に魔術理論まで組み立てていたほどだが。
――そう、組み立てていた。
そして私は今日までその魔術理論をなんとか憶えていた。
いや、魔術理論なんていうたいそうなモノではない。
思春期の男子がなるといわれている中二病の黒歴史と同程度のものだ。
その魔術理論とは、体外に自身の魔力を貯蔵する方法について、だ。

まずこの世界には
・生き物や特定の物質が保有している魔力
・大気中に含まれている無色透明な魔素
……があると仮定して。
生き物は、魔素を呼吸によって吸収すると、
魔力に変換し一定量体にため込むことができる。
無機物には基本的に魔力が宿る事は無いが、
魔石など、生物を介して物質と化したものは、魔力を宿している。
例えばルディが魔術を使い、体内にある魔力を使うとする。
すると魔術は現象を起こした後、無色透明な魔素へ変わる。
魔素が無いとしたら、生き物は何を元に魔力を生成しているのかという、
疑問が発生するので合っているはず。
幼い赤ん坊が魔力を殆ど保有していないのは、
呼吸により魔素を取り込んでいないからだろう。
ここから最低限分かって欲しいのは、
一時的にとはいえ魔力を大気中で維持している事だ。
魔術を発動する時基本使用者の魔力で発動するが、

自身の身体から魔術が噴き出ているわけでは無い。
一時的とはいえ、大気中に体内にあった魔力を放出し、
維持しているのだ。
上記を理解したうえで、
大気中に放出した魔力を拡散しないようにできないかと考えたわけだ。
そうすれば大気中に、ほぼ無限に魔力を貯蔵することができる。
そして体から一々魔力を出す必要は無いので、
常にイメージするだけで魔術が使える状態になる。
まあ言うは易く行うは難しというように、
この技術を体得するのは魔術に高い素質を持っていても難しいだろう。
だが、人神と戦う事になるのならば、それくらいできなければ無駄だ。
それを実際に体得する為に、
魔力増加作業と、魔力を体外に放出する練習をした。
体の中にある魔力を見つけるのに二日掛かり、放出するまでは半日掛かった。
……維持するのは１０秒が限界だった。

改めてルディの規格外さが理解できた。

そういえばルディはラプラス因子のお蔭で、
高い魔術素質と魔力を身に宿しているはずだ。
私には握力が強いとか、髪が緑とか、そんなのも何も無いので、
ラプラス因子は宿っていないのかもしれない。
隣で元気よく魔術をぶっ放すルディを見ながら、思う。

二ヶ月が経った。
毎日延々と魔力を操作し続けた結果、
長時間魔力を体外で維持することができるようになった。
多分赤ん坊だから二ヶ月でここまでこれたのだろう。
成長しきってからこれをやるには少し難易度が高すぎる。
しかしその赤ん坊の私でも、
維持には高度な魔力操作力が必要とされるので、
何かをしながらだと二時間くらいしか持たない。
それを寝ている間にも持続する必要があると考えると頭が痛くなる。

最初に比べたら雲泥の差だが、
常時できるようにしなければ、
貯蔵分が大気中に溶けていってしまうので無意味だ。
因みに放出した魔力を魔術に変換することはまだ一度もしていない。
万が一ルディに私が魔術を使えることがバレたら、転生者だってモロバレルだし。
その分魔術に関しての成長が遅れるかもしれないが、
貯蔵の練習をしているからと割り切っている。
そして最近、魔力の回復が異様に早くなっていることに気づいた。
常に少しずつ魔力を放出して貯蔵する鍛錬をしていたせいか、
試しにと全力で魔力を出しきってみて疲れて突っ伏したときに、
急速に回復する魔力を体内に感じてビビった。
休息後に本当に少しずつ魔力を放出してみると、
減る量よりも魔力の回復速度の方が少しだけ上回っていた。
嬉しさのあまり隠れて魔術教本を呼んでいたルディに特攻した。
ルディは滅茶苦茶焦って本を隠していた。
普通に歩いて来いと、日本語で珍しく強い口調で怒られた。酷い。

3歳になったある日。
ルディが魔術で壁に大穴を開けた。
――心臓が止まるかと思った。

第四話「対策」

家にロキシーという家庭教師が来た。
目が覚めるような水色の髪で、若いわりに魔術師然とした少女だ。
ルディが魔術を使えるという事で、
ロキシーの監視のもと、サラも使ってみなさいとゼニスに魔術教本を渡された。
パウロが呆れたようにゼニスを見ている。
……どうしよう。教えてもいないのに文字が読めるなんておかしい。
ゼニスやパウロは大丈夫だろうが、
転生者故に読めるルディには絶対怪しまれる。
今まで頭の良さを隠してきたのが逆に仇となった。
「母さま、文字が読めないわ」
「……まあ、そりゃ教えてないしなぁ。読めるルディがおかしい」
「それじゃあ私の言った言葉を復唱してみて？
汝の求める所に大いなる水の加護あらん、
清涼なるせせらぎの流れを今ここに、ウォーターボール」

……諦めるという選択肢はないのか。
仕方がない。
魔術が使えると分かっても、よほどの強さでなければ、
この先の物語には影響は出ない、はず。
それに貯蔵している魔力を使ってみるには丁度いい機会だ。
私はそう思い、ゼニスの詠唱を続いて復唱する。
私の体の周りを囲んでいた貯蔵中の魔力の中で、
手の平の部分を漂っていた魔力が詠唱と共に水弾になる。
――あ。
「――っ!?　……奥様、この子は本当に初めて魔術を使ったんですか？」
「……えぇ、そのはずよ。うちの子だし最初からこのくらいできるわ」
「俺の種ってこんなに優秀だったのかよ……」
私の魔術を見て感嘆している両親とロキシーに、
ルディは理由が分からないのか、首を傾げている。
「僕には普通の水弾に見えましたけど、何か違うんですか？」
「――通常、魔術は魔力を移動する工程が必要になります。
ですから、詠唱から魔術が生成されるまで、必ず時間差が発生するのです」

「……今のはその時間差が無かった、という事ですか？」
ルディ、正解。
私の貯蔵魔力の利点は魔力を外部に保管できることの他に、
ロキシーの言った魔力の移動の工程に掛かる時間が、ゼロになるのだ。
魔力を移動させなくても、既にその空間に魔力があるのだから当然と言えば当然だ。
私は今そのことを忘れて丁度いい機会だと、皆の前で使ってしまったんだが……。
「もう魔術を崩していただいて結構ですよ」
「あ、はい」
ロキシーに言われて気づいたが、魔術も維持したままだった。
魔術も所詮は魔力。
ならば魔術を使用した後、大気中に散る前に魔力として維持してしまえばいい。
――あれ、じゃあ魔術の魔力消費ゼロなんだけど？
恐ろしい真理に辿り着いた私を置いて、話は進んでいく。
「どうしたら無拍子でこの子が魔術を使えたのかは分かりませんが、
初めてでこれなら才能は十分あります。
このままいけば、将来私よりもすごい魔術師になりますよ」

「やっぱり二人共私の子供ね！　あなた、ルディもサラも天才だわ！」
「これで剣術の才能があれば完璧だな」
ロキシーの言葉に歓喜したゼニスはルディと私に抱き着いてきた。
パウロは何を想像しているのかニヤリと笑っている。
大方私達に剣術を披露して称賛を浴びている自分でも想像しているのだろう。
ルディは私の魔術を見て考え込んでいるが、
これは流石に教えられない。
まあ教えてもルディに、あのイカレタ魔力操作の鍛錬が毎日できるとは思えない。
起きてから寝るまで体外に放出した魔力を維持する鍛錬とか、
自分でも思うが正気の沙汰じゃない。
それに、私は目立つわけにはいかない。
人神がいつルディを見つけるかは分からないが、
その時に必ず私の存在は知られてしまう。
そしてその時までに対策を練らないと、心を読まれてバッドエンド直行だ。
できるかどうかは分からないがやるしかない。
……よし、今日から始めよう。
ロキシーに魔術を教えてもらえるのは嬉しいが、

それとこれとは話が別だ。
これは世界の運命が左右されることなのだから。

結果的に家庭教師初心者のロキシーには二人同時は難しいのと、
そもそも依頼内容がルディの家庭教師となっていたので、
私はまず文字を読めるようになってからという事で、
ロキシーからは魔術は習えなかった。
よかった……これで鍛錬に励むことができる。……あれ、よかったのか？

―――

一年が過ぎた。
私はベッドの上で座禅を組み深呼吸をして、脳に魔力を送る。
脳全体に外部からの魔力を遮断する高密度の魔力壁を張り巡らせる。
失敗すると、ザクロ待ったなしである。
「――」
額に汗が流れるのを感じながら、

慎重に無意識の奥底へと操作を委ねていく。

――――

「……ふうう。何とか間に合ってよかった……」
毎晩、人神の夢を見るのではないかと冷や冷やしながら、
寝る間も惜しんで鍛錬していたのが実を結んだ。
今までの鍛錬は決して無駄じゃなかった。
達成感やら解放感やらでドーパミンがでて、涙がでてきた。
私は子供用ベッドにダイブすると、狭いベッドの上をゴロゴロと転がる。
人神対策について色々考えた結果、心をどうにかするより、
脳に高密度の魔力壁を張る事で、
そもそも人神に干渉されないようにするのはどうかと考えた。
これが非常に大変で、最終的に一年も能力向上に費やす羽目になった。
結果的に無意識に魔力壁の制御を委ねることができるようになり、
意識の有る無しに関わらず常に張る事ができるようになった。
だが、良い事ばかりではない。

魔力消費ゼロというバグみたいな私なので魔力の方は全然問題ないのだが、
常に魔力壁の制御をしている関係で、
自身の魔力制御の処理速度が鈍くなった。
これは感覚で分かる。
やっと12時間魔力貯蔵できるようになったのに、今では6時間も持たないだろう。
……外部魔力制御、難しすぎです。
これからはまた魔力の制御能力を上げる日々――
「……はぁ」
私はため息をつきながら、――シルフィは早く来ないかなぁ。と、考えていたのだった。

第五話「魔術」

五歳になった。
この世界では歳の五年毎にパーティが行われるらしい。
そういえばこんなイベントもあったなと今日言われてやっと思い出した。
ルディと同じ誕生日なので、一緒にパーティが行われた。
パウロからお祝いに、護身用のペンダント型の短剣を貰った。
魔力を通す事で刃が突き出る仕組みらしく、
貯蔵されている魔力を通すとペンダントから刃が凄い速度で突き出てきた。
五歳に刃物は早くない……？　と疑問に思ったのは私だけではないはずだ。
この世界は日本ほど治安が良くないから、
五歳の内から護身用の武器を一つや二つ持つのが常識なのだろうか。
パウロがルディに薫陶を長々と話しているので、
試しに刃を指の腹に当ててみるとスパッと切れた。
傷を残す趣味は無いのでゼニスから習った中級の回復魔術を無詠唱で、
貯蔵魔力を使い、一瞬で綺麗に治した。

「はい、サラにはこれよ」
そういってゼニスから手渡されたのは裁縫道具だった。
以前、ゼニスと裁縫をしたときに、
私が欲しいと言っていたのを憶えていてくれたのだろう。
前世の両親は仕事人間でプレゼントも現金という夢も希望も無い親だったので、
こうして私の事を考えてのプレゼントが純粋に嬉しかった。
「ありがとうお母様っ！」
そういうとゼニスに抱きしめられた。
……ちょっぴり泣いてしまったのはここだけの話だ。

翌日、かれこれ一年になるであろう日課のジョギングを終えて、
ルディと一緒にパウロに最低限の剣の心得を教えてもらうと、
魔術を一通り放ちまくり、自分の部屋へと戻った。
ルディが部屋の壁に大穴を開けてから、
丁度いい機会だと使われていない物置が、私の部屋になった。

これで一目を気にせず魔術が行使できるようになった。
現在の日常サイクルは、
常に魔力壁に制御能力を割いているのを前提として、
朝、ジョギング後、庭で消費しない魔力を使い、思いついた魔術を片っ端から放ち、
昼、それでも消費していない魔力で魔術の試行錯誤に費やし、
夜、裁縫や書斎にあった本を読んだりして英気を養い、体内の魔力を全て貯蔵した後眠る。
である。
上の通りなので、魔力は一切減らず、ただただ高速で魔力が増え続ける状態だ。
多分魔力を視認できるキシリカやギレーヌが私を見たら、
魔力の霧で私を視認することができないだろう。
それほどまでに増えすぎている。
自分でもこの日常サイクルはどうかと思うのだが、
時間を無駄にしたくないという思いの方が強くてやめられない。
社会人を一度経験している身としては、全然苦ではないのも原因の一つだ。
こんな毎日を過ごしていた私は、色々と出来る様になった。
魔力・魔術の制御は息を吸うように操れるようになり、

遂に貯蔵している魔力を半永久的に溜め続けることもできるようになった。
複合魔術どころか、中級魔術を同時に２０個も出せるようになり、
試しにやってみたら重力魔術・風魔術で空まで飛べるようになっていた。
……流石に魔術制御の鍛錬しすぎたかな？
赤ん坊という人のボーナスタイムに、
毎日毎日寝ている間も常に魔力・魔術制御していると、
こうなってしまうのは必然だったのだろうか。
今ルディと戦えば私の圧勝だ。
私の鍛えぬいた減ることのない魔力で、
０，００１秒刻みに完璧に操れる制御技術を使えば、
雨を降らすどころか天地を創造することすら容易い。
……あれ、私って本当に人間？

――それでも慢心してはいけない。
『無職転生』は調子に乗ると斜め上の敵から一瞬で叩き潰される世界だ。
ルディがそうであったように。
私みたいな物語の異物は、とくにそうなってもおかしくない。

天地創造する私を軽くねじ伏せられる存在が居るはず、
――そう、人神はそんな存在だ。
私は少しだけ弛みかけていた気持ちを奮起させて、
より一層鍛錬にのめり込んだ。

第六話「夢」

ルディとロキシーが卒業試験をしに家から出て行った。
私が前世であれだけ頑張っても、ルディを外に出すことができなかったのに、だ。
私は悔しくて身体強化（ブースト）を身に纏って自然溢れる村を疾走した。
まあ実際は魔術鍛錬の一つを行っているだけなのだが。
「……はぁ。こんな毎日で、私は満足なの？」
長閑でゆっくりと時間が過ぎていく村を横目に、呟く。
生まれ変わって五年。
私は未来の為に、家族の為に、そして何より自分の為に頑張ってきた。
今生では誰もを守れるような人でありたいと願い、
後悔が無いようにひたすら自分を鍛えてきた。
力がなければ奪われるだけだ。
このブエナ村も、フィットア領さえ転移事件で永遠に奪われてしまう。
だからこれで、問題はないはずだ。
転移事件が起こった原因は、ナナホシを召喚する際に生じた魔力の強制収奪。

私が魔力を大量に貯蔵していればしている分だけ、
消失する範囲が狭くなる。
転移を完全に止めることはできないが、
被害を少なくすることはできるはずだ。
間違ってはいない。
そのはずなのに、鬱々とした気分は晴れない。
前世でもこんなことはなかったのに。
ルディの外に出るという、一つの成長を間近で見たからだろうか。
能力ばかり強くなって、私の精神は何も成長できていないような気がする。

村をもうすぐ一周というところで、魔術で強化された眼と耳が、
森の方面から誰かが歩いてくるのを察知する。
はて、こんな真昼間の村の端っこに誰が？
私は足を止めて強化された眼で来た人物を確認すると、硬直した。
全身泥だらけで歩く少年と見紛う少女、シルフィエットだった。
……まだ、ルディとシルフィは出会っていない。
ということはシルフィはまだイジメられていて、

物語通りにいけば、数日後に二人は出会うのだろう。
……だからといって、無視するわけにはいかない。
彼女もまた、助けるべき人の内の一人なのだから。
「こんにちはっ、お嬢さん」
「はぇ、え、こん、にちは……」
シルフィは怯えた様子で近づいてくる私から一歩、二歩と下がる。
「私はサラスヴァティ。怯えなくても、
私は貴女を傷つけたりはしないから安心して？」
なるべく優しい口調で、安心させる様に言うと、
シルフィの脚が止まる。
「う、うん。サ、サラスヴァティ、は、ボクをイジメない……？」
彼女の質問に、言葉でなく抱擁で答える。
「だ、だめ。ボク…汚れてるから……」
「大丈夫。こんな汚れ、すぐに落ちるわ」
しばらくするとシルフィは落ち着いたのか、
先ほどまでの怯えた表情は無くなっていた。
「貴女の名前を教えてくれる？」

「あ、ごめんなさい。ボクはシルフィエット！」
悲し気な表情もいいが、やはり笑顔の方がシルフィは映える。
「シルフィね。改めて、
私はサラスヴァティよ。気軽にサラって呼んでね」
「うん。サラ……」
恥ずかしがって名前を呼ぶ姿が萌えすぎて、お姉さんキュン死しそうです。
「ちょっとそこで立ってて。泥を落としてあげるから」
「ぁ、え、うん」
無詠唱で魔術を使い温かい水を生成し、渦を巻くように操作する。
シルフィを中心として浮くお湯に渦が発生し、
全身の汚れを隈なく洗い流していく。
シルフィは何が起こっているのか分からないのか、
ただあわあわと水にさらされている。
汚れが落ちると、魔術を操作して汚れたお湯を水滴一つ残さず移動させ、足元に捨てる。
私も同じようにしていると、シルフィはようやく思考が戻ってきたのか、
きらきらとした眼で見てくる。

「すごい……。サラ、それって何？」
「魔術よ。簡単に言えば、便利な道具だわ」
シルフィによく見えるように指を立てて、指先に火と水と土の塊を浮かせる。
「今度会ったら教えてあげる」
「ほんとっ!?　ありがと！」
……次会う時は、ルディと一緒かな。
シルフィには同性の友達がいた方が教育上も良いよね。
「私達、今日から友達ね！」
「と、友達！　うん。サラが友達……」
ブツブツと嬉しさをかみしめるに呟くシルフィに、
こんな可愛い子をイジメるようなやつは仕返しをされても仕方がないよね？
と、密かに考えるのだった。

――――

ある日、ブエナ村で不思議なことが起こった。
久し振りに雨が降った翌日、村に住む男子達が、一斉にお漏らしをしたのである。

その数なんと７人。４歳から１０歳までと幅広い男子達が、である。
村という街に比べて比較的近隣住民と繋がりの深いブエナ村にはそれはもう一瞬で広まった。
その男子達は、大人に温かい目で見られ、
同年代の女児からは冷たい目で見られ、男子らの肩身が狭くなったという。
何故こんなことが起こったのか、そんな事を一々調べる者は居らず、
それを影で笑っていた少女には、誰も気づくことはなかった。

はぁ～すっきりした。
あのシルフィをイジメていたという子供が布団が濡れていることに気づいて、必死に隠そうとして結局母親にバレたところが特に面白かった。
これで私の溜飲も少し下がったし、このくらいで勘弁しておいてやろう。
あの子供らの事だから、またシルフィにちょっかい掛けるだろうが、ルディが撃退してくれるので大丈夫だろう。

翌日の朝、ロキシーはこの村を去る事になった。
今回の家庭教師をして自身の無力さを知り、魔術を鍛えながら世界中を旅するという。
両親が止めるが、彼女の意思は固かった。
私とロキシーは、それほど深い付き合いじゃなかった。
当初は物語のキャラだと色々興奮もしたが、ロキシーは真面目で少しおっちょこちょいの、どこにでもいる普通の少女だった。
ルディの家庭教師をしている以上、それなりに話す機会はあったが、私が魔術をぶっ放しまくるのを遠目でみていたからだろうか、魔術を教えて貰う事はついぞなかった。
ミグルド族は甘いお菓子が好きと以前聞いたので、花の蜜を魔術で抽出し、前世の知識を少しだけ使ってクッキーを作って渡した。
今頃ロアの街へと向かう馬車の中で、そのお菓子の美味しさに涙している事だろう。
彼女を見て、決めた。
私の夢は、魔術を極めることだ。
そして極めた魔術で勧善懲悪の限りを尽くすのだ。

これまでは皆の為自分の為とか言っていたけど、結局のところ、私は魔術が好きだ。
前世の陸上よりも何よりも、私は魔術が好きなんだ。
打てば響くというようにすぐに結果として成長を実感できる魔術が大好きだ。
認めよう。皆を助ける為にも鍛えているが、
第一は、私が魔術を好きだから、鍛えているんだ。
そうじゃなきゃ、5年も毎日バカみたいに続けられない。
今思えば、鬱々としていたのは夢がなかったからだ。
しなければならない事ばかりやっていて、自分を見失っていた。
私だって前世があるだけで、結局はただの人間だ。
ｍｕｓｔばかりでは心が鬱になるのも当然だ。
まだまだ魔術は粗だらけで、修正点はいくらでもある。
才能は5歳までに決まると聞いた事がある、この一年何処まで行けるかが鍵だ。
行こう、その夢の先に！

――転生して5年、ようやく私は夢に向かって歩き始めた。

第七話「友達」

午前中、いつものように庭の隅っこで、
延々と夜に思いついた魔術の放出を行っていると、家に女性が近づいてきた。
きつそうな顔立ちの女性だ。
いや、怒っているからきつそうに見えるのか。
ぷんすかといかにも私怒っていますといった風で家に向かって歩いてくる。
と、後ろに子供もついて来ているようだ。
子供の目尻は青く痣ができていた。
こっそりと子供を魔力で包み、解析魔術で青痣を解析する。
結果は殴られてできた怪我とだけ分かった。
そしてそれが真実だろう。
今日は珍しくというか卒業試験を終えて初めてルディが外に出かけているから、おそらくこの親子はルディが追い払ったいじめっ子の母親と、青痣を痛そうにしている子供がイジメていた張本人だろう。
このままだとパウロが恥を掻くことになるので、子供の青痣を治癒魔術で綺麗に治し

てやった。
もちろん治癒魔術特有の暖かな光は隠蔽魔術で隠したので治った事に気づいていない。
母親は家に訪問しパウロが出るなり、ソマルという可愛い我が子がルディにそれはもう一方的に怪我をさせられたという話を語った。
母親はそれが真実だと思っているのだろう。
とても演技でできる怒りの表情では無かった。
もし演技だとしたら、演者として何処へでもやっていけるだろう。
しかし子供の顔には青痣が無いので、信憑性に欠ける形となった。
パウロが子供に怪我がないことを指摘すると、母親は息子の顔を見て、先程まで痣があったのだと更にキレだした。
子供は青痣が治っていることに困惑しているようだった。
しかしエトという母親と元々面識があるパウロは、その言葉を信じ、子供に、そして母親に謝罪した。
しばらくして、母親とその子供は帰っていった。
パウロは何とも言えない表情で、玄関に立ち尽くしている。
殴られたという証拠が証言だけではルディがやったとは言い切れないからだろう。

私はパウロに正面から近づくが、全然反応しない。
どうしたのだろうか。
と思ったら、さっきの魔術ぶっ放しの時に使用した隠密魔術を解いていなかったからのようだ。
魔術を解くと、驚いたようにパウロが仰け反る。
「父様、さっきの親子の話信じるの？」
「……サラ、聞いていたのか。信じたくはないがな、あの表情が嘘とは思えない」
一応、パウロは母親の話を信用しているようだ。
「叱るならルディの話をしっかり聞いてからでも間に合うと思うの」
「――何？」
「ソマルっていう子、悪い子でしょ？」
パウロは私の言葉に頷く。
パウロはあの子供が悪さをする事を知っているようだ。
「そんな子なら、朝出て行ったルディと何かあって、
仕返しに嘘話をでっち上げたとしてもおかしくない」
「……まあ、そうだな。だがそれは飽くまで推測だろ？」
まあ子供である私の話を信じてくれるわけもないか。

「それが推測かどうか、もうすぐ帰ってくるルディに聞いてみれば分かるんじゃない？
――間違っても決めつけないようにっ！」
「あ、あぁ……」
それだけ言うと、私は魔術放出の定位置に戻り、魔術のぶっ放しを再開した。
……だからルディが帰ってくるまでの間、玄関から私をじいっと見るのはやめてほしい。

――――

陽が落ちて夕陽が地面を照らす頃、ルディが帰ってきた。
「父様。只今帰りました」
「おかえりルディ。ちょっといいか？」
「はい、何ですか？」
パウロは穏やかな口調で、怒っているようには見えない。
子供の青痣が無かったのと、私の話で嘘の可能性が高いと思ったからだろう。
「さっき、エトの所の奥さんがきてな、お前、エトの所のソマル坊を殴ったという話を聞いた」

「今日の話ですか？」
「そうだ」
　ルディはやがて思い至ったのか、納得のいった表情をした。
「殴ってはいません。泥を投げつけただけです」
「やはり、殴ってないのか。……何故泥を投げたのか教えてくれ」
「はい、実は丘の上に登ろうとしていると声が聞こえたので……」
　原作通り、シルフィが歩いている所、３人の子供が泥でぶつけて遊んでいたらしい。
　そこをルディが泥で応戦して助けたと。
　全く、その三人には後でお仕置きが必要だな。
　そんな事を考えていると、パウロがこんなことを言い出した。
「……お前の話を聞いておいて良かった。サラには頭があがらないな……」
「サラが、何か言ったんですか？」
「ああ、エトの奥方が来た後にな。
　俺はその話を聞いててっきりお前が殴ったもんだと思ってたんだが……」
　うん、ちょっと黙ろうか。
「お父様っ！　泥遊びって楽しいと思うの！」
「なにっ？　うぉっ」

「それ！　それ！」
「ちょ、サラ、急にどうしたんだ？」
「急に何するっうぁ!?」
最初はルディとパウロは避けるだけだったが、
途中から楽しくなったのか、三人で泥を投げ合って遊び、
ルディと私が魔術を使い、パウロを的に泥を投げ出した頃、
買い物から帰ってきたリーリャとゼニスに怒られました。
ごめんなさい。でも、楽しかったです。

――――　パウロ視点　――――

俺の子供達が、二人して魔術まで使って俺に泥を投げてくる。
どうしてこうなったのだろうか。
事の起こりは昼下がり、凄い剣幕でエトの奥方が家に怒鳴り込んできた。
話を聞くと、どうやらルディがソマル坊を殴ったらしい。
しかし顔に青痣ができたという話だが、見る限りどこにもそんなものはない。
それを指摘すると、奥方は更に怒りだした。

傷が無いとはいえ、ルディが殴ったという話は本当なのだろう。
あの怒りは決して演技でできるものではなかった。
そう判断して、俺は安心した。
ルディは大人びた所もあるが、まだまだ子供だ。
大方ソマル坊達が遊んでいる所を見かけ、仲間に入れてもらおうとして喧嘩になったのだろう。
父親として、説教の一つでもしてやるか。
そんな風に考えていると、突然目の前にサラが現れた。
こんなに接近されるまで気づかない程、俺は考え込んでいたのか？
サラはあの話を聞いていたらしい。
そりゃそうか、あんな大声で話していたら聞こえるだろう。
すると、叱るのはルディの話を聞いた後にしろと、何度も忠告するように言って離れて行った。
娘はルディとは似ても似つかずに育った。
ルディと違い、生まれた頃は泣いてばかりだったし、
俺やゼニス、リーリャによく甘えている。
ルディと似ている所は、５歳にしては異様なほどしっかりしている事だろうか。

双子なのに、どうしてこうも違うのか。
自慢ではないが、俺は水神流上級を扱える。
だから、魔力の流れはある程度感覚で読み取れる。
ルディの魔力の流れは普通に読み取ることができた。
しかし、サラの魔力の流れだけはどうしても読み取ることができない。
というか、サラに近づくだけで常にモヤモヤした魔力の奔流を感じて、読み取るどころの話ではない。仮に魔術を仕掛けられても、まったく反応できないだろう。
――それに、あれだけ魔術生成して、まだ魔力切れないのかよ。
庭でかれこれ3時間ずっと魔術を放出し続ける規格外な我が娘を見て、思う。

しばらくすると、ルディが家に帰ってきた。
俺が先の話をルディにすると、どこか思い至った表情をした。
話を聞くと、息子はただ悪ガキ三人からロールズさんのとこの娘を助けただけらしい。
殴った云々はソマル坊の嘘だったわけだ。
サラの忠告を聞いておいて良かった。
あのままだったら碌に話も聞かずに父親面してルディを叱っていただろう。

その話をルディに話しているとサラが泥を投げつけてきた。
最初は何故こんなことをするのか困惑した。
だがだんだんと精度が上がっていく泥玉をよけることが楽しくなってきた頃、
サラとルディが魔術を使い、まだ一度も泥玉に当たっていない俺に集中砲火し出した。
くそっ、サラの魔力の流れが邪魔してルディの魔力流れも読めん！
「それはズルいぞ！」
「何がズルいのかしら」
「……何やってるんですか」
振り返ると、目が笑っていないゼニスと呆れた表情のリーリャが居た。
庭が泥だらけになっている事を問いただされた。
「いや、あれは最初にサラが――」
「最初はサラだったとしても、あなたも一緒になって遊んでたでしょう？」
言い逃れは、できない。
ここは大人しく謝っておくのが吉だ。
下手に言葉を重ねても相手を刺激するだけ。
「「ごめんなさい」」

ゼニスに庭の掃除を言い渡されたが、ルディとサラの魔術で一瞬で終わった。
俺は何もできなかった。
俺も簡単な魔術くらい習得しておこうか。
父親の威厳がまずい。

第八話「ターニングポイント」

6歳になった。
この一年、この世界で誰よりも頑張っていたと思う。
自分はもしかしたらオルステッドよりも強いのではないかと思ったりもしている。
今日も庭の定位置に、魔術の鍛錬をしようとやってきた。
6歳になって鍛錬にひと段落ついたので、今度は実践を想定して鍛錬することにした。
現在行っているのは、
午前中、魔術を駆使した三次元移動の鍛錬。
午後は、転移魔術の構築。
である。
接近戦の場合、無意識レベルで魔術を行使できるので離れるまでの時間は簡単に稼げると思うが、もしどうしても逃げなければならなくなった時、転移魔術と三次元的な移動手段は必須だ。
魔術を駆使した三次元移動は、元々魔術は使用できたので、動き方を憶えれば後は簡

単だった。
しかし、転移魔術がなかなかイメージできない。
原因は私だけが転移できても、外部の貯蔵魔力がその場に置いていかれてはしまうからだ。
貯蔵魔力も自分の一部だと、どうしてもイメージできない。
一度自分だけを転移させてしまったことがある。
その時は外部の貯蔵魔力が全て制御下から離れ、危うく庭どころかグレイラット家の屋敷がダンジョン化するところだった。
幸い転移した位置が直ぐ近くだったので事なきを得たが。
やはり魔法陣を使わなければ難しいのだろうか。
そう思いながら、貯蔵魔力に自分が現れるイメージをして魔術を発動した。
――発動できてしまった。

目の前にはもう一人の自分が私を見て、茫然と立ち尽くしていた。
何が、と思ったら、私の魔術を放つ定位置がずれていることに気づく。

転移魔術が成功したのかと思ったが、目の前に私のドッペルゲンガーが立っているのでそれも違う。
体に冷たいものが奔る。
私は何か恐ろしい失敗を犯してしまったのかもしれない。
外部魔力は制御下に置かれたままだ。
しかし私はその魔力にアクセスすることができない。
――困惑しながらも体に目を落としたとき、全てを察した。
魔術を散々知り尽くしている私は、自分の体を構成しているそれが、純粋な魔力であることを理解した。
つまり、私は目の前の『私』によって作られた謂わば『再構成された私』で、本体となんら遜色のない思考を持つ『別個体』だという事だ。
「……ねえ、あなた。自分が何をしたのか理解できた？」
「え、えぇ。転移魔術が失敗した結果、もう一人の私ができてしまった……」
ショックを受けているみたいだけど、こっちの方が何倍もショックよ。
私は転移魔術を行使した結果生まれた『私』であり、今生まれたばかりの魔力体だ。
前世の記憶だってあるし、今生で魔術をひたすら磨いてきた記憶もある。
消えるだけの運命なんて受け止められるはずがない。

「……私は、消えたくないわ」
「……分かってる。でも、あなたは此処に居る事は、出来ない」
そう。
私は本体の『私』ではないのだから、ここで今までの様に、家族と一緒に暮らすことはできない。
理解はできる。
そうするほかないのは。
でもあの温かい家にもう居られないと考えると、心が理解することを拒む。
……いや、『私』はまだあの温かい家に居られるんだ。
『再構成された私』は、あの温かい家がいつまでもそうであれるように、知力を尽くそう。
魔術を行使したら消えてしまう体になってしまったが、それでもやりようはある。
例えば、消えた時に本体に記憶を譲渡してしまえば、私は『私』に戻ることができる。
「私は世界を回って、色々な情報を集めてくる。今の私にできるのは、それくらいよ」
「……ありがとう」
まったく、『私』が先にそんな顔をしたら、私ができないじゃない。
私は、サラという別個体は、夕暮れの村に消えて行った。

――――

ああ、失敗した。
魔術で今まで一度も失敗らしい失敗をしたことが無かった私が、初めて失敗した。
（……失敗しかけたことならあるけど）
それも、自分と寸分たがわない、もう一人を生み出すという、倫理に外れた禁忌を。
『私』は平気そうな顔をしていた。
でも決して感情は平静では無かったのは想像に難くない。
あの顔の下に、壮絶な葛藤があったのだろう。
私があっちの『私』だったら、あんな冷静に居られただろうか。
叫び、絶望し、本体の私に罵声を浴びせなかっただろうか。
あの『私』は、その哀しみを、怒りを全て呑み込んで、分身であることを受け入れてくれた。
私も頑張ろう。
あの『私』への繋がりは僅かに感じる。
消えたらすぐにわかるだろう。

『私』が頑張ってくれるのだ。
私は、それ以上に頑張らなければ、申し訳が立たない。
まず第一に、転移魔術を完璧に出来る様にしよう。
――あの尊敬する『私』が帰って来た時、誇れるように。

第九話「町」―　裏　―

本体と別れて、数日が過ぎた。
ここ数日で、分かった事がある。
なんとこの体、食事、睡眠が必要無かったのだ。
それどころか呼吸すらしていなかった。
改めて私は、本体ではないのだと実感した。
私の住んでいたブエナ村から、一番近く大きい都市は、ロアの町だ。
最初はすぐにでもそこに行って情報収集を始めようと思った。
だが、私には馬車に乗るお金も無かった。
この時期は餌を求めて魔物がウロウロしている。
魔術の使えない私はボロ雑巾の様にズタズタにされる自信がある。
いや、使えない事は無いか。
魔力消費が無いので、私を構成する魔力から魔術を行使できる。
中級魔術を同時発動しただけで今の私は消えてしまうがな。ははは……はぁ。
そうして、村から離れられない私は、ブエナ村の森に居た。

ここならロールズさんが見張ってくれているし、ブエナ村の住人に見られることも無い。
私は首に掛けていたペンダント型短剣を手に取る。
それはパウロに誕生日のお祝いで貰ったもの。
そして、パウロが知り合いに作ってもらった世界に唯一つしかないもの。
私が私である唯一の証明だ。
あのとき、本体の首にペンダントは掛かっていなかった。
無意識化で私に渡した方が良いと判断したのか、それはわからない。
だが、私ならそれくらいはできるだろう。
「――っふ！」
森の木に向かって短剣を振るう。
魔術で全身の魔力を循環させ、身体能力を飛躍的に向上させた一撃。
木には深い傷がつくが、倒れるほどではない。
切れた断面を見れば、ガタガタと波打っていた。
パウロがやったなら、綺麗な断面で、こんな木など簡単に切り倒してしまうだろう。
こんなことになるならパウロに少しでも剣術を習っておけばよかった。
いや、習っていたら魔術の習得が遅れていたか。

フィットア領は他の領と比べ、弱い魔物しか出ない。
私の実力でも勝つことは可能かもしれない。
だがそれは、あくまで私が戦えたらだ。
一度、パウロに連れられて、ルディと一緒に魔物を見に行ったことがある。
パウロは華麗な剣術捌きで、素早いターミネートボアとアサルトドッグを倒していた。
その姿にはとても感動と尊敬の念を覚えたが、同時に恐怖も覚えた。
「おい、そこで何をしている」
一体だったら何とかなると思うが、初戦であの群れにあたったら、私は冷静に対処できる気がしない。
この先であの群れに遭遇する可能性を考えたら、此処で鍛錬するしかないのだ。
「……こんな小娘をこんな森まで、まったく……はぁ」
「ん？」
何やら声がしたと思い後ろを振り返ってみると、美形の金髪エルフがいた。
どことなくシルフィの顔立ちに似てる気がする。
あぁ、ロールズさんだ。
「こんにちは、ロールズさん」

「私の名を知っているのか？　何処の家の子だ？」
あ、私ロールズさんと一度もあった事なかったわ。
というかやばくないかこれ。
グレイラットの娘って言っても本体が向こうに居るし。
一人旅をしている子供って言えばいいか？
いやそれだったら名前を知っているのがおかしい。
もし聞かれたら此処に来る時に聞いたって言えばいいか。
だが本体に会ったら顔同じだし、色々とまずいことになる。
地味に詰んでて笑えない。
「ヴァティっていいます。一人旅をしている小娘です」
「……一人旅かい？　その年齢で？」
「ははは、これでも魔術の腕はあるんですよ」
思いっきり制限掛かってるけどね。
「森は魔物が出る。見た所剣の鍛錬をしていたようだが、それなら安全な所でやった方がいい」
「ははは、そうですね。そうさせてもらいます」
よし、何とかなったな。

いや顔を見られた問題は何ともなっていないが。
ロールズさんに護衛されながら森を抜けると、遠くから誰かがやってくる。
「あ、サラっ！　お父さんも！」
シルフィよ、世の中にはタイミングというものがあるんじゃよ。
……仕方がない、現代日本で鍛え上げた私の本気を少し出すとしよう。
「ルフィ、ヴァティと知り合いなのか？」
「え？　うん！　この子が私の初「この街に来てから初めてなったお友達です」
「そうか？　もう三人も友達が居るんだな。ルフィ偉いぞ」
「えへへ。三人？　二「少しシルフィと遊んできてもいいですか？」
「あ、ああ。ルフィ、気をつけるんだぞ」
は、はぁ。恐ろしい。
シルフィ心臓に悪すぎるから私の墓穴を勝手に掘らないで。
「サラ、前に会ってから全然話してくれないよね」
むくれた顔でシルフィが呟く。
確かにルディがシルフィを家に連れてきたときも、魔術を教えるという約束をルディに押し付けて、殆ど話していなかった。
シルフィが家に来るのは稀なので、あれから本体の私とも会っていないのかもしれな

い。
「ごめん。今日からいっぱい話そう？」
「ほんとに？」
「あ、ルディと一緒に居る時は話しかけないでね。秘密の関係よ」
「かっこいい……」
子供は秘密という言葉に弱い。
現にきらきらした眼で私を見てきている。

私は、原作にはあまり関わらないようにしている。
下手に関わると原作乖離が起こり、人神に勝てない未来に来てしまう可能性があるから。
しかし、シルフィに多少魔術を教えた所で、何かがそれほど影響するわけでも無いだろう。
それから何週間か、ロールズの昼ご飯を持ってくるシルフィと一緒に魔術で遊んだ。
まあ私はそれ以外の時間、文字通り寝る間も無く、ひたすら短剣の鍛錬をしていたが。

しかし、いつまでも此処に居たせいで、ロールズに心配され始めた。
ので、仕方なく私はロアの街に出発することにした。
シルフィは名残惜しいが、私の使命は世界の情報収集だ。
いつまでもこの場所にいることはできない。
後は本体に任せるとしよう。
翌朝、ロールズさんに一言告げ、ブエナ村を出た。
道中アサルトドッグに襲われたり、サンドワームやトゥレントに襲われたりしながらも、数週間寝ずに歩き続け、ロアの町に辿り着いた。
体は問題ないが、精神疲労が蓄積されたせいか、辿り着いたと同時に倒れてしまった。

目が覚めたら部屋の中。
無事にロアの町の中に入れたようだ。
正直検問を潜り抜けるにはこれしかなかった気がする。
私が目覚めたのを知って、門番の方が事情を聴いてきた。
食べ物に困って一人旅をしていて、ロアの町は仕事が沢山あると聞いたのでここまで

来たが、遂に心身共に疲れ果てて門の前で倒れたという話をしてやった。あながち間違っていない。

魔物に何度も襲撃され服もボロボロになっていたのが信憑性が高かったのだろう。

門番の兵士はとても同情してくれて、着替えの服と食事、アスラ大銅貨を二枚くれた。

滅茶苦茶感謝した。

彼が居なかったら私はボロボロの服で仕事を探す羽目になっただろう。

……でもそれと引き換えに、人として大切な何かを失った気がする。

前世で最上級の教育を受けていた私は、簡単に仕事を見つけることができた。

早朝の誰もやりたがらない土方の仕事だ。

当初の予定と違い、全然教育に関係のない仕事に就いた。

だが、身体強化を併用しながらの運動は、効率の良い体の動かし方を教えてくれた。

私は時間に関係なく常に体の状態は万全だし、体が怪我した傍から治癒魔術で治しているのでこれ以上に最適な仕事はない。

土方の仕事仲間は最初私を馬鹿にしていたが、人の数倍の速度で仕事をする私に、だんだんと親しみを持って話しかけてくれるようになった。

その中の一人に、水神流上級を扱える御仁が居たのが幸いだった。

仕事の合間に剣を教えて貰い、水神流初級までは何とかものになった。

身体強化を併用すれば、なんとか中級に食らいつけるといったところだろうか。
そんな毎日を送りながら、世界の情報を収集した。
世界中の気候や情勢など、本体の私に必要だと思った情報を集め続けた。
そういえば、転移事件の時、赤い珠が上空に出現していたことを思い出した。
探してみた。
町長の屋敷の上空に、赤い珠があった。
うん、それだけ。
解析魔術で下手に刺激したらどうなるかわからない。
それにこれを解決するのは本体の仕事だ。
私は転移事件が起こった時、この場所から離れておく事しかできない。
私の体は魔力で構成されている。
巻き込まれたら真っ先に純粋な魔力に分解されてしまうだろう。
それに、ルディにこの町で鉢合わせするわけにもいかない。
七歳になったら別の、そう、ラノア王国にでも行こう。
そしてサラスヴァティ・グレイラットの名でラノア魔法大学で特別生になれば、魔術の勉強ができて、学費も要らない。本体に戻っても使う事ができる。
無詠唱で中級魔術まで使えるんだから、入れはするはず。

推薦は……うん、その時になったら考えよう。
あれ、私って今、本体より今生を満喫してる??
本体は夢があるが、原作に縛られる。
私は夢がないが、目的があり、消えるまで自由に人生を謳歌できる。
今なら本体に、少しだけ感謝できそうだ。
『おっ、ヴァティが来たぞぉ!』
「今日もいっちょ、やりますか!」

『『『オォー!!』』』

――転移事件まで、あと三年。

第2章　少年期　入学編

第十話「伸び悩み」

パウロとゼニスの間に子供ができた。
皆喜んだ。
私はあまり喜べなかった。
そして、その一ヶ月後。
リーリャとパウロの間にも子供ができた。
皆凍り付いた。
私は溜息をついた。
物語として知っていたとはいえ、自分の父親が浮気するとなると話は別だ。
今まで仲良くしてきたリーリャが、屋敷を居なくなってしまうかもしれない。
私は家族会議で無言を貫いた。
パウロの援護をしてやる気は全くないが、リーリャが居なくなるのは嫌なので、結果無言だった。
結局ルディがパウロに全責任を押し付けて、上手く話しをまとめてくれた。

ちょっと、話纏めるの上手すぎない？　と思った。
まあルディは、前世から口先は上手かったし……。
決して、魔術ばかりしていて精神年齢４０になっても上手く立ち回れなかったわけでは無い。

ゼニスの出産は大変だった。
逆子だったのだ。
産婆が死ぬとかふざけたことを言っていたが、リーリャが必死に働いてくれた。
私はこれぞとばかりに治癒魔術を母子ともに掛けた。
こういう時に使わなければ何の為に覚えたのか。
治癒魔術は対象の体に直接作用するので魔術消費がゼロにできない。
勿論自分に対してやるならゼロにする方法はある、が、それは魔術使用者だからこその技だ。
自分以外を対象とした場合、使用した魔力は癒す時に対象に定着してしまう。
その時点でそれは私の魔力では無く、対象者の魔力だ。

当然操れない。
私の外部魔力一万分の一にも満たない魔力を使用した頃、なんとか出産した。
赤子は元気に泣いた。
妹だ。
前世で兄は居たが妹は居なかったので、とても嬉しい。
直後、リーリャが産気づいた。
ここら辺は曖昧だったが、予想はできていた私は上手く立ち回った、と思う。
前世の私は早産だったので、その時の記憶を思い出しながら、テキパキと働いた。
産婆も経験はあったようなので、とても助かった。
無事生まれた。
こちらも妹。
どっちがアイシャでどっちがノルンだろうか。

その後、よく手伝ってくれたと産婆に褒められた。
６歳が出産を手伝ったのだ、それは褒めるか。
精神年齢４０のおばさんでなければ素直に喜べたんだが。
私からしたら、自分の母親と異母なのだから、手伝うのは当然だという気持ちが強い。

ここまで気を張ったのは何年振りだろうか。
下手したら、いや、下手しなくとも前世振りかもしれない。
今日は二人の妹が産まれた良き日だ。
二人の服でも裁縫と魔術で作ってあげようっと。

ゼニスの娘は、ノルン。
リーリャの娘は、アイシャ。
そう名付けられた。

翌日、私が魔術を併用しながら裁縫で赤子の服を作っていると、シルフィがやって来た。
「シルフィ、ルディはさっき丘に行ったわよ？」
「サラに会いに来たの！　この前まで森の方に来てたのに、来なくなっちゃったから……」

――はて、この前まで？
シルフィと会って以来、森には近づかないジョギングルートに変えたから森には一度も行っていないのだが。
「ふふ、ごめんなさい？　私の妹が生まれたから色々忙しかったのよ」
「あ！　そういえばルディが弟か妹ができるって言ってた」
取り敢えず、話の中で聞くしかないか。
「この前森に来た時、私何してたかしら？」
「え？　私に魔術を教えてくれたり、ペンダントに変形するカッコいい剣をずっと振ってたり？」
それもう一人の私!!
一体、森で何やってるの!?
世界中で情報収集するとか言ってなかったっけ!?
……いや、冷静に考えよう。
私は効率重視だから、無駄なことはしないはず。
シルフィに魔術を教えていたのは、村から出て行くときに会って、無下には出来なかったから？
それとも護身用の剣を振るっていたということは、剣を使えないとならなかったって

こと？

……もう一人の私は魔術を使えない、もしくは使えない状態？

それならすべてが納得いく。

お金も持っていない私は、当然馬車でロアの町に向かう事ができない。

それなら徒歩で行くしかない、でも魔術がまともに使えないか、心細い。

そうだ、剣術をある程度鍛えて、少しの魔術で補強すれば何とかなるんじゃ？

剣の鍛錬に森を使っていたら、シルフィに出会ってしまった。

仕方ないから魔術教えながら、剣の練習をするか。

ある程度モノになったからロアの町に行ってきます。後は本体よろしく。

……同一人物だからか、容易に想像できてしまった。

「……？」

「あー、そういえばそうだったわね。それじゃあシルフィも、裁縫、やってみる？」

「う、うんっ教えてくれる？」

「勿論よ。隣に座ってよく見ててね……」

何か騙しているみたいで、後ろめたかった。

『私』は私だけど、シルフィがわざわざ家に来るほど信頼されたのは、私じゃないのに。

けどま、これからは私が信頼を築いていけばいい。

勿論、原作が崩壊しないよう、ルディに依存させないといけないのだが。
……『私』は今頃、しっかりロアの町に辿り着いただろうか。

七歳になった。
私はある事を思い出し、膨大すぎる外部魔力に悩まされていた。
そのある事とは、ギレーヌが魔力視を持っている事である。
以前私は、ギレーヌやキシリカが私を見れば、魔力の霧で見えないだろうと呑気な事を考えていた。
その時はまだ良かったのだ。
しかし、年を連ねる毎に魔力回復速度が上昇し、延々と使わなかった結果、魔力は測り切れない量になってしまった。
もし魔力眼で見られたら、即魔神扱いだ。
というか見た人は、気絶するんじゃなかろうか。
私がもし見れたとしても、絶対に自分の周囲は見たくない。
最近頑張って魔力の濃度を上げて、なんとか半径1メートルまで魔力を縮められた。

これで何とかなっただろう、と思い眠った。
翌朝、部屋内で物音がして目が覚めた。
何事かと周りを見回した。
私の眠っていたベッドの周りには、魔力結晶がゴロゴロと転がっていた。
乾いた声が口から零れ落ちた。
遂にダンジョンと同じ現象が私の周囲で起こり始めたのだ。
ダンジョン≒私という方式が、頭の中に浮かぶ。
昨日、ルディはシルフィとラノア魔法大学に行きたいとパウロに言っていた。
あとどれだけ時間があるか分からないが、パウロがギレーヌを呼ぶのも時間の問題だ。

取り敢えず、急いで魔力結晶を魔力に分解……できなかった。
簡易の置き場所として、部屋の押し入れに入っている服のポケットに詰め込んでおく。
リーリャがちょくちょく掃除に来るので、それまでにどうにかしないとばれてしまう。
一定以上同じ場所にいると、魔力結晶が生成されてしまうらしい。

目が覚めてからは、一度も生成されていない。
部屋の中をぐるぐると歩き回りながら、どうすればいいか考える。
そうだ。外部魔力を常にかき混ぜていればいいのではないか。
「……よし」
かき混ぜた結果、立ち止まっても魔力結晶は生成されなくなった。
しかしもう一つの問題、ギレーヌが来た時、魔を凝縮させた存在みたいにしか見えないという問題がある。
……魔力眼の遮断？
そんな天才魔術師が一生掛けて研究するような対策方法を私が思いつくわけがない。
そもそも私には魔術での対処の仕方しか知らない。
魔力眼を魔術で対策してもその対策が見られたら意味がない。
「いや、ちょっと待って？」
ルディは私に比べたらアリと虎の差だが、魔神クラスの魔力を持っているのだ。
ギレーヌはルディを見て、何も思わなかったのか？
キシリカはルディを見て、気持ち悪いとか何とか言っていた気がする。
覚えていない……。
現状で私の周囲に漂っている魔力量はルディ千人分強といったところか。

たまにルディの魔術鍛錬を見学しているので、魔力量は把握済みだ。
私の方がルディよりも魔力回復速度において圧倒的に速いので、これだけの魔力差が発生している。
記憶上、ルディの魔力＝魔神の魔力なので、私は魔神千人分の魔力を保有していることになる。
五歳から今日までの約二年間、魔力が貯まり続けるとこうなるのは予想していた。
そしてその魔力を全て使い切れるだけの魔力制御能力が私にはある。

いや、今はそんな話はどうでもいいんだ。
今大切なのは、魔力眼対策だ。
――何故今更になって気づいたのか、もう少し早ければ何か案が浮かんだものを……。
両親の寝室から物音がした、起きてきたのだろう。
パウロが手紙を出してまだ一日。
流石に一日二日で決めてやってくる事はないはず。
それまでに対策を考えなくては……。

――　パウロ視点　――

――朝起きたら娘が色々とやばい。
俺はいつものように皆で揃って朝食をとっていた。
新たにできた娘二人の泣き声でノイローゼ気味だが。
以前まで感じていた魔力の流れも感じなかったので、気楽に食べられた。
サラが珍しく険しい表情で黙々と食事をとっていた。
普段は明るくよく笑っているので、皆で顔を見合わせてしまった。
ルディの件で、何か思う所があったのか。
サラはルディと同じ歳の誕生日だ。
昨日ルディが魔法大学に行きたいと言ったのを聞いて、サラは何も言わなかった。
普通の子なら、自分も行きたい、ルディだけずるい。と駄々をこねるだろう。
勿論サラがそういったなら、ルディの様に条件付きだが行かせてやるのも吝かではない。
ここは父親として相談にのってやるか。
朝食をとり終え、部屋から出て行こうとしているサラに近づいた。

――ゾワッ

「……っ!?」

渦巻く魔力の奔流に、思わず体が硬直した。

近づくまでは今までと同じ、いや今までよりも魔力の流れは感じなかった。

だが、一定距離まで近づいた瞬間、胸が押し潰されるような魔力の奔流を感じた。

昔行った迷宮の最下層でもこれほど濃密な魔力を感じたことはない。

サラが毎日、朝から晩までずっと魔術の鍛錬をしているのは知っている。

以前寝る前に裁縫をやっていたのを見たことがあるが、それも複雑怪奇な魔術を併用していて、ずっと魔術を使っていなければ死ぬのか我が娘は、と呆れていた。

ルディも行き急いでいると思う。が、

どちらかと言えば、サラの方が何倍も行き急いでいるように思った。

お前は一体、どこに向かおうとしているんだ?

魔術を使い外へ飛び出して行った娘の背中を、俺はただ眺めていた。

第十一話「冒険者ギルド」―　裏　―

七歳になった。

身長も伸び、体つきも幼児体型から段々と女性らしい体型になってきた。……魔力体だが。

多分この体は本体に合わせて成長するのだろう。

私のこの半年の運動量は本体の比ではない。

朝から晩まで魔術を駆使して土方仕事。

合間の休憩と睡眠時間は剣術の鍛錬。

私を基準に成長しているとしたら、今頃ムキムキ幼女が誕生していてもおかしくない。

まあ、パウロやゼニスはスマートな筋肉を持っていたから、それほどにはならなかったと思うけど。

私は現在、ラノア王国に向かっている。

お金が勿体なかったが、トラウマがあるので馬車に乗る事にした。

乗合馬車で三週間揺られ、ドナーティ領へ渡った。

ドナーティ領は北方大地に武器を輸出しているだけはあり、素人の私から見ても良い剣が多く並んでいた。
いつまでも護身用の剣をメイン武器にするわけにはいかないので、安くて丈夫な短剣を買おうかと見て回った。
道中、私を見て何か言ってちょっかいを掛けてくる冒険者が居たが、そういう輩に限って弱いので、軽くあしらってやった。
どうやら、私を魔力体だと気づいているようだ。
一般人でも魔力眼を保有している人が居るのか。
これは本体に聞かせてやらないとまずいんじゃないか？
……今更教えに行くのは面倒だ、忘れたことにしよう。
ドーナティ領から剣の聖地まで一ヶ月、短剣を買ってお金が心もとなくなったので魔術で身体強化して徒歩で移動した。
ラノア王国に着いたら冒険者をして稼がないといけないな。
赤竜の上顎で、普段居ない筈の赤竜に会う――なんて主人公特性も無く、無事辿り着いた。
景色は見渡す限り白銀へと変わり、人が生きるには厳しい環境だと体感した。
ただ今回はこの場所に用は無いので、一日と待たずに移動を開始した。

ラノア王国までの道は険しく、雪原という事もあって中々前に進めなかった。
これなら無理してでも馬車に乗っていけばよかった。
そう思いながら森沿いの雪道を進行していると、森の茂みがガサガサと揺れる。
茂みから私に向かって飛び出してきたのは、
「――ラスターグリズリーか！」
牙が私に届く前に、距離をとるために風魔術で上空に体を飛ばす。
慣性の法則で落ちる前に、重力魔術で重力をゼロにする。
私の足元で、３頭の熊達が必死にグアグアと体を伸ばしている。
はあ、危なかった。
精神的に疲れていたせいで、生物探知魔術が上手く作動していなかったらしい。
流石にこんな魔物と接近戦をしたら私は死ぬ。
三次元立体駆動が最低限使えてよかった。
あぁ、でも重力魔術を行使した状態だと初級魔術くらいしか使えない。
適当に火炙りにでもして追い払えばいいか。
足元から弱火でじっくり炙ってやると、ゴロゴロと転がりながら森に逃げて行った。
今思ったが、中々に危険なことを私はしていたようだ。
頭が回っていなかった。

休養をしっかり取った方がいいのかもしれない。
重力魔術を解除しようとして、ある事実に気が付く。
「このまま飛んでいけばすぐじゃん……」
私は馬鹿だった。

夜、ラノア王国に着いた。
流石に魔法大国なだけあって至るところに魔術が施されていて、夜でも照明で明るくなっている。
店を点々と回りながら、どんな魔道具あるかを見た。
魔道具とは、内部の魔法陣に魔力を送って使う特殊な道具だ。
少しだけ具体的に言えば、
魔法陣に使用者が魔力を送って使うタイプと、
魔法陣と魔力結晶が内蔵されているタイプがある。
ざっと見て回った感じ、日常生活で使う物から、戦闘中に使える物まで多種多様だった。

その道具の用途によって、上の二種類は使い分けられているようだ。
私がへたに使用して魔力体の魔力総量が減ったりなんかしたら大変なので、買う気は無い。
ルディの様に魔術を効率化させてくれる杖も欲しいが、その実験も本体に任せるしかないだろう。
……目の前にあるのに実験ができないなんて、拷問だ。泣きたい。
魔法都市シャリーアまではまだまだ距離があるので、一度安価の宿で眠る事にした。
安価といっても部屋のグレードが少し下がるだけで、普通の宿だ。
泊まる分には申し分ない。
窓から漏れる淡い光をカーテンで遮り、意識を落とした。

―――

翌朝、まだ早い時間に目が覚めた。
いや、正確には意識を戻した、か。
私は睡眠を必要としない。
だからか眠ろうとしても眠ることができない。

なので意識レベルを極限まで下げて、その状態を維持するのだ。
久し振りに、思考がクリーンな状態になったのを感じる。
それと同時に、意識を落とす前の私がどれだけ狭い視野で物事を考えていたのかが分かった。
懐にある残金は銀貨三枚。
日本円で三万円ほどしかない。
これは今日からでも冒険者を始めてお金を得ないといけない。
宿も食事も無くてもどうにでもなってしまうこの体だが、流石に宿無しは人間性をすり減らす。
それに推薦を貰うには、冒険者になって名を売るのが王道だ。
問題は、魔力量的に上級を使うには難しいという点だ。
私の魔力総量はルディの初級魔術に使われる魔力量と同等。
更にその中の八割は体の構成に必要だ。
だから残りの二割の魔力で、魔術を発動しないといけないのだ。
いくら磨きぬいた魔術制御能力をもってしても、そんな魔力量じゃ上級魔術を発動する事は出来ない。
誰だこんなハリボテみたいな魔力量で生み出した奴はっ！

自分でしたね。
はい、ごめんなさい。
しかも転移魔術で失敗して生まれた。
魔力の残りかすに『私』の記憶がくっついているだけの欠陥体。
もし私がしっかりと制御できるだけの技術を持っていなかったら。
私はロアの町に辿り着く前に消え失せていただろう。
幸か不幸か維持できるだけの制御能力を持っていた結果、一年以上も存在しているわけだが。
まあ、そんな感じな私なので、ルディの様に推薦を貰えるだけの活躍をできるか怪しい。
赤竜がやってきたら大人しく魔力に還って本体に戻るしかない。
うん？　魔力に還る？
「それだ!!」
私の声で、街を歩いていた歩行者の視線が一身に集まる。
「ご、ごめんなさい……」
だがこの方法を使えば上級魔術もなんとか使えるだろう。

私は人の眼を避けるように冒険者ギルドに入っていった。

早朝にも関わらず、ギルド内は多くの冒険者で溢れていた。
いや、早朝だからこそこれだけ集まるのだろう。
巨大な掲示板には我先にとばかりに群がる冒険者の姿があった。
私は冒険者が私に目をつけない内に受付へと向かう。
受付は女性の人だった。
「おはようございます。冒険者ギルドに登録しに来ました」
「は、はい？……お嬢ちゃん、お父さんかお母さんに許可貰ってる？」
苦笑いしながら訊いてくる受付のお姉さん。
ははは、これは完全に子供扱いですわ。
まあ体は七歳だからそりゃそうなりますわな。
……許可貰って無いけど、本体は私じゃないしいいよね。
「はい。それに、魔術も大抵上級使えるので大丈夫です」
「じょ、上級？　う、嘘よね？　ま、まあいいです。そういうことなら、この用紙に記入

をお願いします」
全く信じていないお姉さんは置いておき、渡された用紙に目を落とす。
名前と職業を書く欄があり、その下のには注意事項と規約が書いてある。
一応注意事項と規約に目を通し、問題ない事を確認して記入する。
「記入終わりました」
「では、紙をお預かりしますね。こちらに手を乗せて頂けますか？」
透明な魔法陣が描かれた板に言われた通り手を乗せる。
「名前・サラスヴァティ・グレイラット。
職業・魔術師。
ランク・F」
お姉さんは私の家名を読み読み上げながらも驚いている。
まあ知っててもおかしくはない。
アスラ王国でも普通に有名だし。
「どうぞ、こちらが貴女様の冒険者カードになります」
そういって渡された何の変哲もない鉄の板。
そこには、ボンヤリと光る文字で、

名前：サラスヴァティ・グレイラット
性別：女
種族：人族
年齢：7
職業：魔術師
ランク：F

そう書かれていた。
良かった。種族も性別も普通だ。
もしかしたら魔力体だから変な風になるかもしれないと思ったけど。
どうやら杞憂だったようだ。
「ありがとうございます。早速依頼を受けて良いんですよね？」
「はい。自由にお受け下さい。それと、パーティの説明はよろしいでしょうか」
「あ、大丈夫です」
私はラノア魔法大学に行くまでの間しか冒険者しないだろうし。
もしパーティを組む必要が出てきたら改めて聞けばいい話だ。

依頼書の争奪戦は終わったようで、巨大な掲示板に居た大勢の冒険者はまばらになっていた。
掲示板に貼られた依頼書を一つ一つ見ていく。
よし、これでいいか。
全ての依頼を読んだ上で手に取ったのは、
Bランクのスノウタイガーと、同じくBランクのラスターグリズリーの討伐依頼だ。
「お願いします」
「あの、失礼ですが、もう少しランクを落とした方がよろしいのでは……？」
まったく、上級魔術が使えるようになったんだから、あんな魔物ぼっこぼこにできるわ。
「大丈夫です。私はアスラ王国から徒歩でラノア王国にやって来ました。
ラスターグリズリーなんかも道中出会いましたが、あれくらいなら可愛いもんですよ」
そうそう、今の私なら赤竜でも撃退できる、と思う。
使用できる魔力が少し増えただけだが、その少しで戦術の幅が百倍くらい広がった。
「あ、ミケーネさん！　今日もラスターグリズリーの討伐依頼受けますよね？」

「うん？　受けるが、それがどうかしたのか？」
私と話していた受付の女性が、近くに居たミケーネとかいう冒険者を引き留める。
そしてコソコソと何かを冒険者に伝えていた。
「そういうことか。
――やあ、お嬢ちゃんは強いみたいだね。
だけど、ギルド側としては少し心配みたいなんだ。
そこで提案なんだが、僕たちのパーティもラスターグリズリーの依頼を受けるから、一緒に行かないか？」
受付の女性がわざわざコソコソと話したのが一瞬で無駄になったな。
まあ、それで一緒に行けば、ギルドの人にも実力は信用してもらえるだろう。
これはチャンスだ。
ミケーネさんのパーティに私の強さをドドンと見せつけて、周りの人に話してくれれば一気に有名になるだろう。
まあそれをしなくても数日もすれば有名になりそうなものだが。
「分かりました。私がしっかり戦えるところをお見せしましょう」
私はそういって、ニコッと笑った。

第十二話「未来」

ルディはグルグルに縛られて馬車に乗せられていった。
隣ではゼニスとリーリャが芝居がかった口調でルディを見送っている。
私は物語に一段落がついてほっとした。
これで多少原作に縛られずに行動できるだろう。
まあだからといって、何か行動が変わるわけでもないのだが。
私は背中に背負っている魔力壁を感じながら安堵する。
はあ、何とか外部魔力を誤魔化すことができた。
ギレーヌと会ったが、特に何も言われることはなかった。
私の勝利だ。
魔力結晶ゴロゴロ事件から数日が経った頃。
私は魔力壁ならぬ、魔力結界を作成していた。
性能としては単純で、魔力を遮断するというものだ。
魔力壁を二年前から制御している私なので、超強度の結界が生成できた。
その結界内に外部魔力をぶち込み、圧縮し、背中に背負った。

たったそれだけで、ブラックボックスを背中に背負った普通の少女の完成だ。
どんな難題も、解決策が思い浮かべば何とかなるものだ。
私は魔力が回復したそばから背中を通して結界に押し込んでいる。
ギレーヌからは、魔術師を目指しているには魔力が少なすぎる少女に見えただろう。
外部に魔力を漂わせているわけではなくなったので、魔術のゼロ秒生成はできない。
まあ戦闘になったら結界を解放するので、何の問題も無いか。

ルディが居なくなって半年経った。
シルフィは一人で健気に頑張っている。
たまに私に泣き言を言ってきたりもするが、少しずつ自分で前に進んでいる。
しっかりと地に足をつけ、自分の脚で歩き始めたのだ。
そろそろ私も、前に進む時が来たのかもしれない。
前にもいったが、私は原作を最後まで読んでいない。
更に十数年も前に読んだっきりだ。
これからもどんどん忘れていってしまうだろう。

そんな状態では、人神には勝てない。
そこで私は、占命魔術という魔術に目をつけた。
この魔術は本来、魔法陣を使い適当な未来を見る魔術だ。
だが現在では廃れて使われなくなってきている。
狙った未来を見る事ができないのが原因なのだろう。
しかし、それでも未来を見る事ができる凄いものだ。
私は魔法陣を使わなくてもこの魔術を行使することができる。
転移魔術を行使できる私ができない筈が無いのだ。
早速私はイメージで魔術を構成し、念のために二秒後には強制的に魔力に戻る様にしておく。

――そして脳裏に映った未来。
飲んだくれた大人のルディが、酒場で突っ伏している未来。
血だらけのシルフィが、物言わぬ骸となって横たわっている未来。
二秒が経ち、魔術が強制終了する。
想像にもしていなかった残酷な未来に、呼吸が浅くなる。
親しい友達の悲惨な未来を、心の準備無しに見たのだ。

そうなるのを誰が責められよう。
どういうことだ。
私が居るというのにこの惨状は、未来の私は何をしていた？
こんな結果、私の知っている物語にあったか？
ルディはハッピーエンドで人生を終えたはずだ。
間違ってもシルフィが殺されるなんて事態は原作では起きていない。
――分かった。
老デウスが未来からくるという未来を、この魔術は教えてくれないのだ。
それとも、老デウスが来ない世界なのかもしれない。
……そうでないことを祈ろう。
もしそうだとしたら、私が老デウスの代わりをしなければならない。
しかし、あんなに上手くルディに助言できるわけがない。
あれはあくまで未来の自分だったからこそ、あそこまで上手く事が運んだのだ。
私が助言しても全てその通りにしてくれるとは思えない。
もし老デウスが来ない世界なのだとしたら、無理にでも召喚してやろう。
私の力なら、そのくらいできるはずだ。
いや、そのくらいして見せる。

視えた未来についてはこのくらいにして置き。
この占命魔術を上手く戦闘や未来に役立てる方法に役立てられるようにしなければ。
キシリカと会えて未来視を貰えれば戦闘は楽になるのだが……。
彼女は決まった場所には居ないし、仕方がないか。
取り敢えず十歳になるまでにこの魔術で常時未来が視えるくらいにはしておこう。
……転移事件が起きたら、迷宮にとんでゼニスの記憶が消えてしまう。
記憶が消えないように結界を張ってしまおうか。
パウロが死んでしまうのもどうにかしないといけない。
でも、どうにかしたら原作崩壊だ。
いやでも、人神はロキシーとルディは必ず結ばれる運命にあると言っていた。
ならばパウロが死ななくてもルディはその内ロキシーと結ばれるだろう。
だが、それをしたら人神は私の存在を知ってしまう。
魔力壁のせいで夢に呼べないのを知ったら、邪魔者として消そうとするだろう。
消せるものなら消してみろと言いたい所だが、周りに被害が及ぶと考えるとそれも難しい。
そうだ、オルステッドに会いに行こう。
彼はループしていると記憶している、私の事は知っているだろうか。

いや知っていたら私が居て、その上で人神に勝てなかったってことだ。
初見であることを願おう。
でも、オルステッドは何処に居るんだろうか。
キシリカと同じで会う手段がない。
転移事件の時にナナホシを迎えにオルステッドはロアの町に来る。
だが私もその事件の被害を抑える為に巻き込まれる必要があるのだ。
何処に飛ばされるか分からないが、その時にオルステッドとは会えない。
……占命魔術でオルステッドが何処かに居る未来が視られるように鍛錬するしかない、か。
私は三年後に向けて、占命魔術の鍛錬を鍛錬内容に加えるのだった。

第十三話「推薦状」―　裏　―

甲龍歴４１６年。
ここは中央大陸北西部にある、ラノア王国。
ラノア王国は魔法三大国と呼ばれる、北方大地でも指折りの大国の一つである。
そんな国の魔法都市シャリーア。
その町に滞在しているのが、
今回密着する対象となる冒険者……。
巷で『妖精』と呼ばれている少女である。
彼女は五年前、アスラ王国から一人で徒歩でこの地までやってきたという。
普通の冒険者であれば、忽ち魔物に食い殺されてしまうだろう。
そんな話が信じられているのは、ひとえに、彼女の強さにある。
魔術で空を飛び、上級魔術で魔物を封殺する技量を持ち。
地上で戦えば水神流の剣術と三次元的な動きで敵を圧倒する万能性。
詠唱も無ければ油断も隙も無い。
これだけ強ければ、妬む者も出てくるのが冒険者だ。

しかし彼女は多くの冒険者達に慕われている。
それは彼女の普段の行いが影響しているのは間違いないだろう。
その一端を、今から見て行こう。

妖精の朝は早い。
謙虚で真面目な彼女は、太陽が顔を出す前に起き出し、宿の空き地で鍛錬を開始する。
鍛錬内容は、魔術を使った剣術の応用と三次元移動を主とするもの。
この国は一年中雪が積もっていて、とても寒い。
常人ではすぐに風邪をひき、日課にするのは困難だろう。
しかし、彼女はこの町に来てから欠かさず行っているという。
太陽が昇り始め、他の冒険者が起き始めた頃、彼女は鍛錬を終え冒険者ギルドへ赴く。
ギルド職員も欠伸をしているような時間に、彼女は更新されたばかりの最新の依頼を受けて行く。
今日選んだ依頼は、ラノアの王勅令の依頼であるSランクのホワイトサーペントとSランクのスノーゴーレム。
どちらも討伐するにはSランク相当の実力を持つ者がパーティで討伐するものだ。
「大丈夫ですよ。趣向を凝らせば一人でも案外簡単に倒せたりしますから」

そう言いながら、彼女は優しく微笑む。
彼女は軽い朝食を摂ると、依頼現場に向かった。
現場までは距離があったが、魔術で空を飛んで行った。
私は見逃す訳にはいかないと馬に乗って、現場に急行した。
現場に着くと、白い大蛇と妖精の戦いはもう始まっていた。
全長五十メートルはあろうかという大蛇は宙を舞う妖精に、猛毒のある牙で襲い掛かる。
その速さは、遠くから見ていた私でも認識することができなかった。
しかし妖精はその素早い猛毒の牙をひらりと躱すと、大蛇の口の開いた一瞬を狙い、豪炎をその中に叩きこむ。
一瞬で肺まで焼き尽くされたホワイトサーペントは、のたうち回り最後の悪足掻きを妖精に仕掛けようとする。
しかし、妖精は遥か上空まで退避していた。
――三分程もがき苦しんだのち、その大きな蛇は息の根を止めた。
「見ていたんですか、記者さん。どうですか？
少し蛇の弱点を理解するだけでこうして一人でも倒せるんです。まあそれなりの技量は必要としますけどね」

蛇の体から上手く魔石だけを剥ぎ取り、彼女は言う。
彼女は相手の弱点を理解して、的確な対処ができるのだ。
とても初めてホワイトサーペントを倒した者とは思えない、完璧な戦いを私に見せてくれた。
次の現場へ着いた。
スノーゴーレムは周囲の雪を巻き込みながらどんどん巨大になる規格外の魔物だ。
雪の妖精が突然変異で魔物になったものと推測されている。
故に前例がなく、当初はBランクで討伐依頼がされていた。
しかし、討伐に向かったAランクの冒険者パーティが二人を残して全滅したので。
現在はSランクにまで上がっている。
スノーゴーレムの体長は三十メートルくらいで、今も少しずつ大きくなっていっている。
妖精は上空に躍り出ると、魔術を生成し始めた。
気が付くと、そこには魔術があるだけで妖精の姿が無かった。
しかし魔術は膨大な熱量の灼熱の弾をもって完成し、射出された。
スノーゴーレムは両腕をクロスさせ守りの体勢に入るが、灼熱の弾はその両腕を一瞬で水に溶かし、気体に蒸発させ、ゴーレムの体の中心部を貫通して大穴を開けた。

スノーゴーレムは体を修復する間もなく瓦解が始まり、魔石を残して消える。
急所を一発で射抜いたのだろうか。
彼女は魔術を放った場所と反対の場所、ゴーレムの背後を飛んでいた。
一瞬で背後に移動したのは一体どういう技なのかと聞いてみた。
「あれは私が上級以上の魔術を行使すると起こる副次結果ですよ」
と彼女は苦笑いしながらも答えてくれた。
私は魔術師では無いので詳しくは分からないが、そういう風に言っていたとだけ記しておく。

その後、無事依頼を完遂した彼女は、冒険者ギルドに戻った。
冒険者たちは、戻ってきた彼女を気にしながらソワソワとしている。
「冒険者の皆さん、今日はホワイトサーペントを狩ってきました。これはその魔石です」
その言葉と片手におさまりきらない魔石を見た冒険者からは歓声が上がる。
「私ではあの魔物をこの町に持ってくることができないので、
素材が欲しい方はご自由に剥ぎ取っていってください！
素材の場所はこの紙に書かれている通りです！
これで最後ですが、喧嘩は止めて下さいねっ！」

紙の置かれたテーブルにこぞって集まる冒険者達。
その顔はまるで獲物を見つけた獣のようであった。

そう、彼女は素材を独り占めしようとしないのだ。
だからこそ、高難易度の報酬の高い依頼を彼女に奪われたSランク冒険者達も、彼女を嫌う事はない。
そうして付いた二つ名は『妖精』。
人々に潤いを与え謙虚で強い彼女の二つ名は、こうして広まっていくのだ――。

――――　サラスヴァティ視点　――――

ラノア王国に住み着いて、約三年が経った。
今は初めてラノア王国に来た時と同じ、雪の降る季節だ。
本体はそろそろ転移事件に巻き込まれる頃だろうか。
私はラノア魔法大学に推薦入学する為に名を上げてきた。
今ではSランク冒険者となって強い魔物をぽんぽこ倒している。
正直途中で魔法大学に入学する為の額は稼げたのだが、ここまで来たら意地だと推薦を貰うまで頑張ってきた。

今日もホワイトサーペントなるSランクの魔物とスノーゴーレムとかいうただデカいだけのSランクの魔物を倒してきた。
魔石以外は他の冒険者達にあげたが、別に深い意味があるわけではない。
あんな大きさの魔物は、私の魔力総量じゃ持ち運べないのだ。
本体程の魔力があれば鼻歌交じりにでも重力魔術で持ち上げられるのだが。
それでも魔物の部位で一番高価な魔石は毎回しっかり取っているし、依頼の報酬でもう既に一財産稼いでいる。
どのくらいかと言えば、一生遊んで暮らせるほどの金額だ。

宿に帰ると、すっかり顔見知りとなった店番の人が手紙を渡してきた。
どうやら私宛らしい。
表面には『ラノア魔法大学』と書かれていた。
遂に特待生になれるのだろうか。
宿の自分の部屋へ戻ってくると、腰の短剣とポーチを外しながら、重力魔術で封を開け、紙を取り出す。
依頼後で疲れているのでベッドに倒れ込むと、書かれている内容を見る。
『サラスヴァティ・グレイラット様。

はじめまして。
『ラノア魔法大学』で教頭をしておりますジーナスと申します。
ここ数年に渡り、サラスヴァティ様の雷名『妖精サラスヴァティ』は、ラノア王国で轟いております。
空を飛ぶ魔術を主として多種多様な魔術を使う天才冒険者とお聞きいたしました。
本来ならもう少し早くにお招きしたいところでしたが、年齢が１０歳になるまで待たせていただきました。
その素晴らしい魔法技術をさらに磨くおつもりはありませんか？
ラノア魔法大学は、あなたを特別生として招く用意があります。
特別生とは授業免除かつ学費免除。
本校の蔵書や設備を使い、好きに研究等をなさっていただく立場の生徒です。
そして、現時点であなたはラノア王国に多くの益をもたらしています。
そんなあなたには特例として、月一の朝礼も免除、専用の研究室も一部屋お貸しいたします。
７年以内（卒業まで）に一つの研究を完成させ、
それを本校あるいは魔術ギルドに譲渡していただければ、
無条件で魔術ギルドのＣ級ギルド員への推薦も可能です。

もし仮に何の研究成果も出せずとも、他卒業生と同じくD級ギルド員に登録いただけます。
ぜひ一度ご挨拶させて頂く機会をいただけませんでしょうか。
突然のご依頼で恐縮ですが、ご検討いただけたらと存じます。
何卒よろしくお願い申し上げます。
ラノア魔法大学教頭　ジーナス・ハルファス』

と書いてあった。
やったー、ぱちぱちぱち。
有名になっても全然送られてこないから無理じゃなんじゃないかと内心諦めかけてたけど。
そうか、年齢が十歳になるまで待ってくれたのか。
ただ、十歳で入学しても結局同学年から何か言われそうだな。
ラノア王国内で私の二つ名を知らない人はいないと思うけど。
いやそれは流石に盛ったな。
でも、五人に一人は知ってくれてるとは思う。
それだけここ三年、頑張ってきたのだから。

何だか今までの苦労が肯定されたようで嬉しい。
そうだ。私は頑張ったんだ。
入学したら大学の蔵書を全部読み漁って、本体に情報提供してやろう。
上手くやれば私が消えずに情報だけを渡すことができるかもしれない。
いや、それならちょっと剣術にぶれた私でもできそうだ。
魔術一筋の私になら絶対にできるだろう。
明日、魔法大学へ行ってみようか……。
私はそんなことを考えながら、意識を落とした。

第十四話「転移」

十歳になった。

占命魔術の鍛錬は最初の一年で終わり、現在は相手の魔術を誘導・無効化する魔術の作成中だ。

この発想は占命魔術でルディが似たような魔術を使っていたのを見て思いついた。

誘導はできていなさそうだったから、完全にパクったわけではない。

占命魔術は大まかにだが、みたい未来が視られるようになった。

といっても、未来に縛られるつもりは無い。

むしろ未来を全力で壊しに行くつもりだ。

現にゼニスの思考領域に魔力壁を設置しておいた。

相手の体内には簡単に設置できないので、魔力を籠めた魔力結晶に魔力壁の魔法陣を何とか描き、それをネックレスに加工して渡した。

ゼニスにはお守りと言って常に首にかけているように言った。

魔法陣は燃費が良い。

あの調子なら五年はもってくれるだろう。

虹色というには変な色の空から一筋の光が落ちてくるのを見ながら、私はその時を待った。

――――

目が覚めた。
五年前から当たり前のように操作していた膨大な外部魔力が無くなっていた。
居心地が悪い以上に、演算領域が空いて心がスッキリしている。
想像以上に外部魔力が邪魔になっていたようだ。
今なら天変地異すら呼吸一つで起こせる気がする。
上体を起こし、周囲を見渡す。
見渡す限り青色だった。
頭がおかしくなりそうだ。
私の今いる所は、こう呼ばれるところだろう。

――絶海。

絶海の孤島とかではない。
絶海だ。
では私の座っている所は孤島ではないのか。
目線を下げて見れば、温かい氷の上に座っていた。
温かい氷なんて存在するはず無いが、私が無意識のうちに魔術で構築したのか。
見てやっと、自分が魔術を使っていることに気が付いた。
日頃から魔術を使っているとこうなってしまうのか。
いや、魔力結界を久々に解放したせいで加減ができていないのだろう。
まあするつもりもないが。
それにしてもどうすればいいのだろうか。
東西南北何処を見ても海。
リングス海ならどっちに行っても大陸が見えてくるだろうが、大陸の外側の海だった場合はどうしようもない。
だが、大陸がどっちにあるかなんて分からない。
「……？」
海の底から重々しい強い魔力を感じる。
以前の私の外部魔力と同程度ぐらいか。

原作で何か記述があっただろうか。
「考えるより、潜ってみた方が早いわね」
重力魔術で海を割り、そのままゆっくりと降りてみる。
降りれば降りる程圧を感じるが、外部魔力で鍛えた私は何の問題も無い。
外部魔力の重圧が初めて役に立った。
日の光が届かなくなったので眼を強化する。
海底は、ゴロゴロと大きな岩が転がっている。
強い魔力は、この岩の下から放たれているようだ。
大丈夫だろうか。
今の私の外部魔力はルディの魔力の三分の一しかない。
これが魔物だったら勝てる気がしない。
というか第七列強レベルではないだろうか。
そんな見たことも無い列強に例えながら、大岩を重力魔術で浮かす。
少し浮上し、離れた所からその存在を注視する。
「……洞窟？」
海の底に、洞窟のような穴があった。
そこからこの重々しい魔力が噴き出ているようだ。

……入ってみるか？
でも危ないし。
いや、入るだけならいいかも。
そもそもこの洞窟なんだ。
ええい、ままよ！

洞窟の中は広く、奥にずっと続いているようだ。
「……」
折角此処まで来たんだから、奥まで進んでみようか。
『グガァーーー……』
奥から魔物の声がする。
だが、あの魔力の主ではないようだ。
というかあの魔力は今いる場所よりも深い所から感じる。
……ちょっと怖い。
私に勝てる魔物何てそうそういないと思うけど、怖いモノは怖い。

こっから風魔術で叩き潰そう、そうしよう。
「グギャァ・・・・」
「ごめんなさい」
いやいや、魔物に謝ってどうする。
それにしても、この場所は迷宮か？
海にある迷宮なんて、有名どころではリングス海にある魔神窟ぐらいだ。
あれ？　じゃあここ魔神窟？
どうしよう、ここ攻略したい。
絶対に強いアイテム手に入るって。
人神倒せるアイテム手に入るって。
心の悪魔たちが私に囁いてくる。
「……」
私は転移魔術をノーコストで使える。
ぴょんぴょん跳んでダンジョンボスが持つ部屋まで行く。
ボスを神級魔術の強襲で滅茶苦茶に消し飛ばす。
チートみたいな魔道具手に入れる。
正直、私は自分の力をあり余してる。

幾ら夢が魔術を極めることでも、使えなければ楽しくない。
ここ数年、限界の魔術を使えない事にムズムズしていたのだ。
今まで我慢していた。
少しくらい、私に得があったっていいだろう。
「……転移魔術で高速攻略、いきますか」

――転移初日、私はダンジョン攻略を始めた。

第十五話「入試」―　裏　―

私はラノア魔法大学にやってきていた。
入試試験を受ける為だ。
別に試験などやらなくてもいいほど有名なのだが、他の生徒に私が来た事を知らせることに意味があるらしい。
試験相手は同じ特別生のリニアーナ・デドルディア。
「こんなチビが相手ニャ？　肩慣らしにもならないニャ」
「ファックなの」
結界の外から肉を片手に中指を立てて罵ってくるケモミミ。
原作に出てきていたような気がするが、ちょっと私を舐め過ぎでは？
いや、本当に私よりも強い可能性はある。
彼女は有名なデドルディア。
大森林の姫君なのだから。
「では、試験開始！」
「私は優しいから先手は譲るニャ」

「そうですか。では」
リニアの耳元に魔術で爆音を発生させる。
それと同時に、重力魔術で足を浮かせ、動きを完全に止める。
リニアは驚いてされるがままになっている。
それが狙いだとも知らずに。
驚いて全く反応できていないリニアを土魔術でグルグル巻きに拘束する。
口も封じ、魔術も使わせない。
何が負ける要素になるか分からないからだ。
「……」
「むーっ、むーっ」
「試験終了です！」
終了の声を聴き、涙目で私を睨むリニアを縛る土魔術を魔力に戻す。
「ず、ずるいニャ！　もう一戦やらせろニャ！」
「次負けたら言い訳できませんけどいいんですか？」
「いいニャ！　試験官合図よろしくニャ！」
試験管もあまりに一方的すぎた試合に、もう一度やることを決めたようだ。
確かに何一つ抵抗させなかったのはまずかったか。

試験開始の声と共に、リニアは息を吸う。
吠魔術か。
止めても良いが、それではさっきと同じ結末で面白くない。
「ニャァァァーーーー!!!」
「――っ」
咆哮を聞くと、体の平衡感覚が揺らぎふらつく。
その間にと私に一直線に突っ込んでくるリニア。
速度は速い。
吠魔術も難敵だ。
だが作戦が御座なりすぎる。
「な、何で！」
「一直線に突っ込んで来たらそりゃ捕まりますよ……」
私の目の前には、土魔術でグルグル巻きにされたリニアが居た。
結界の外では信じられないものを目にしたような驚愕を顔に張り付けながら肉を食うケモ耳。
幾ら魔術に特化していない私でも一直線に突っ込んでくる敵を魔術で拘束するくらいできる。

いや、無詠唱だからできるのか。
無詠唱ができない魔術師なら詠唱する間もなく叩き潰されるだろう。
「私は無詠唱魔術師兼水神流剣士です。次からはもっと頭を使って戦った方がいいですよ」
そう言いながら近づき、リニアのけも耳をモフる。
「や、やめるニャ、私の耳をかってにモフるにゃぁぁ」
「勝者が正義です」

―――

試験は合格だった。
まあ、予想通りの結果だ。
明後日には入学式がある。
それまではまた依頼受けて実践の腕でも上げていよう。
……それにしても、リニアのけも耳、フサフサで柔らかかったなぁ。
あの感触を思い出して口元が緩む。
また一つ、大学生活の楽しみが増えたようだ。

第十六話「迷宮」

魔神窟最深部。
目の前にある荘厳で巨大な扉を見て、私は溜息を溢す。
何でこんなダンジョンを攻略しようと思ったのか。
ダンジョンに入る前の私に問い詰めたい。

最初は楽しかった。
強そうな敵が現れて、私の魔術で無双していく。
ちょっと魔物がグロかったが、爽快感があってどんどんと下層に降りていった。
だが、まったく終わりが見えない。
お腹が空いた。
眠くなってきた。
どんどん空気が淀んでいく。
息苦しい。
でも、ここまで来て引き返す訳にもいかない。

初日、私は百層近く潜った。
でも終わりは見えなかった。
そういえばロキシーは『龍神孔』という一万年以上前からあるダンジョンは、推定で２５００層あると言っていた。
このダンジョンが魔神窟だとしたら、だいたい二千年ほど前だろうか。
七百層くらいあっても不思議ではない。
ああ、なんでこんな所に潜ってしまったのだろう。
きっと、外部魔力から解放されて特に何も考えていなかったのだ。
だからこんなダンジョンに平気で足を踏み入れた。

二日、三日、潜っても潜っても終わりは見えない。
魔物は段々と強くなっていく。
腹が減ったら魔物を食べた。
時にはゲテモノみたいな魔物も食べなければならなかった。
おいしいものもあったが、調味料が無いのですぐに飽きた。
眠くなったら、周囲に結界を張って眠った。
魔術で体は浮かせていたし、結界内の気温も温かくした。

でも安眠は出来なかった。
魔術で無理矢理眠ることはしない、そんな事をしたらこの先魔術でしか眠れなくなるから。
歩き疲れた。
空を飛んだ。
陽の光を浴びたい。
最小の太陽に似た物を生み出した。
魔物が臭い。
消臭魔術を使った。
この時ほど魔術を努めてきて良かったと思った事は無い。
そんな日々を、一ヶ月続けた。
ある日、眠りながらダンジョンを平行移動して進んでいると、目の前に巨大な扉が現れた。
あの莫大な魔力の根源が、その奥から感じられる。
私は油断していた。
このダンジョンに入って、一度も私に攻撃を与えられた魔物は居なかった。
だからそのまま、半分寝ぼけた状態で、扉を開けた。

視界が真っ白になり、結界に亀裂が奔った。
……ほぇっ!?
寝ぼけていた意識が冷や水を被ったように覚まされた。
冷めるとほぼ同時、反射的に結界を斜めに反らす。
謎の光は、結界に背後の壁に反らされる。
ビキビキ、とダンジョンの壁から音が聴こえた。
何とか間に合ったことに安堵しながら、結界を高速で修復する。
謎の攻撃が止み、その攻撃をした敵の姿が見えた。
頭には無数の蛇、醜く歪んだ顔、黄金の翼。
その眼からは怪しい光を発している。
前世で人並みには神話を知っていた私にも分かった。
……あれ、メデューサじゃない？
という事はさっきの攻撃は石化の光線？
石化を解く魔術はまだ一度もやったこと無いから危なかった。

寝ぼけててそのまま石化とか、後でやってきた冒険者に笑いものにされる。
取り敢えず、メデューサは首を落とせば勝てるかな？
魔力を飛ばす、が何かを感じ取ったのか避けられる。
ゼロ距離からの魔術で仕留めたかったがそんな簡単にはいかないらしい。
メデューサの眼がまた光る。
反射障壁でカウンターを狙う。
メデューサの眼が石化した。
使い古された攻略法が成功したことに私は呆気にとられる。
それと同時に髪の毛の蛇が私に向かって放たれるが、本命の配置していた魔力で全て燃やし尽くす。
『ギャァーーーー・・・・』
絶望に濡れた悲鳴を上げながら、メデューサは走って突っ込んでくる。
体長五メートルはありそうかというメデューサの物理攻撃は、確かに強い。
しかしそんな苦し紛れの攻撃で私の結界は突破することはできない。
メデューサの拳で結界に罅が入る。
更に蹴りによって結界が破壊される。
「ふ～ん、それだけ？」

先程は一枚だけだった結界は、何枚にも重なってそこに存在していた。
私はもう既に目の前の魔物への格付けを終えていた。
メデューサが怒りに狂い結界を壊そうするのを冷静に眺めながら、魔術を構築する。

倒れ伏したメデューサの亡骸から魔石を取り出す。
額にむき出しになっていたので、簡単に取れた。
体格のいい大人の拳くらいのサイズで、灰色の魔石だ。
これを媒体に魔術を使えば私はどれほど強くなれるだろうか。
取り敢えず服のポケットに押し込み、部屋の最奥に置いてある宝箱に目を移す。
膨大な魔力の正体はメデューサではなく、あの宝箱の中にある物のようだ。
「……」
知らず知らずのうちに心拍数があがっている。
年甲斐もなく興奮しているらしい。
長く深呼吸をして、魔術で大きい宝箱を開ける。
「……黄金の鎧？」

箱の中には、金銀財宝や魔道具が沢山あったが、ひときわ目が引いたのがそれだった。
眩しすぎる。
製作者は何を思ってこんな使いにくい鎧を生み出したのか。
私は目を細めながら、不用意に鎧を手に取った。
「うぐっ……！」
しまった。呪具の類だったか。
鎧から魔力が私の体を伝い、体の支配権を乗っ取ろうとしてくる。
鎧から手を離せない。
間に合わないかと思った。が、魔力の侵攻は脳の直前まで迫り、止まった。
人神対策の魔力壁が邪魔で、立往生しているらしい。
体内に障壁を張っている人間なんて、私くらいだろうなっ……。
その間に私の外部魔力で逆に鎧の乗っ取りを開始する。
攻められたなら、その隙に相手の根城を奪い取ってしまえ！
「はぁぁぁぁぁ!!!」
苦しい。
相手の魔力が圧倒的に多すぎる。
七人で何千人が守る城を落とすようなものだ。

そうだ！　あれを使えば……！
さっきポケットに入れた石を鎧に触れていない方の手で取りだす。
「これで、本当に私の勝ち……っ！」
効率が飛躍的に向上した魔力で、圧倒的な魔力を押しのける。
この程度、外部魔力に比べたらまだ温い！

「はぁ、はぁ、はぁ。勝った……」
何気にメデューサ戦より何倍も危なかった。
何とか鎧の支配権を乗っ取ったが、そのせいで外部魔力がすっからかんになってしまった。
魔力を維持するだけの余裕も無かったからだ。
あれだけ魔力制御に自信を持っていた私が、その維持すらできなくなるなんて。
この鎧の支配力の恐ろしさを物語っている。
幸い、魔力壁の方は何とか維持できた。
これが無ければ私は一瞬の間に鎧に乗っ取られていただろう。

着た。
ダボダボかと思ったが、着たら自動で私の体に調整された。
手元に黄金の杖が現れた。
先っぽにはメデューサの灰色の魔石。
この鎧は使用者に合わせて武器まで生成してくれるのか。
財宝の中にあった金縁の鏡で全身を確認する。
うん、可愛くて強そう。
でも所々鎧が無い所がある。
手とかほぼ丸出しだし、鎧というか、装飾品みたいな形状に変化してしまった。
ゴツゴツして前もよく見えない鎧よりかはマシだけど、思ってたのと違う。
……まあいいや。
気を取り直して、杖を通して魔術を使ってみよう。
●ラだ。
「――っ」
いつもの感覚で普通の火の玉を生み出そうとしたら、五メートルくらいのメラメラとした業火球が現れた。
鎧の効果か熱は全く感じなかったが、相当の熱量があるのは見て取れる。

今のはメラ●ーマではない、メ●だ。をまさか自分にやってしまうとは。
やったやった。一ヶ月もダンジョンに潜った甲斐があった。
……何か思ってた以上だったけど。
日常的に付けてても邪魔にならない鎧と言うのは凄い。
体が鎧の魔力で黄金に輝いてるけど、日の当たる所に行けば違和感は感じないだろう。
強力な鎧と杖を手に入れたな。これでまた格段と夢と目的に近づいた。
――人神、打倒に向けて！
「えいえいおー！」
意気揚々とダンジョンを戻っていく私はある事実に思い至り足が止まる。
……ああ、ダンジョンから出るのに、また時間が掛かりそうだ。
転移の起点になるものを置いておけとあれ程……。
私はダンジョン制覇した嬉しさも忘れ、トボトボと憂鬱な薄暗い迷宮に戻っていくのだった。

第十七話「入学初日」――裏――

「諸君ら魔術師は、未来に向かって羽ばたき――」

入学式当日。

頭に違和感のある校長が、魔術師とは何たるかを語っていた。

熱意は凄く伝わったが、私達生徒には正直どうでもいいことだ。

周りの生徒たちも、うんざりとした表情をしている。

あ、校長と目が合った。

目をつけられると面倒なので、表面上はしっかり聞いている風を装う。

……何の魔術の研究しようかなぁ。

異世界転移魔法陣はナナホシ達が作ってくれる。

あ、私の戦闘力増強のための研究にしようかな。

それなら本体も活用できるだろうし。

よし、いっちょやってやりますか。

そう意気込み入学式を終えて、教室錬に移動した。

その間に私を知っている多くの生徒たちに声を掛けられた。
前世でもこれだけ注目される事は一度も無かったので少し気恥ずかしかった。
玄関に入ると案内版があった。
それを頼りに特別生の教室に向かう。
教室に入ると、見覚えのある姿が二つ。
「げ、あいつが来たニャ」
「ファックなの」
「失礼じゃない？　リニアにプルセナ」
入試で戦った獣族リニアと、その相棒のプルセナだ。
私にボコボコにされたのに特別生になれたのか、よかった。
あれが原因で落とされてたらどうしようかと思った。
「他の特別生は居ないの？」
「んにゃ、特別生はサラと私らの三人だけニャ」
本当に？
じゃあ一年生しか特別生いないのか。
前年度まで強い人居なかったのかな。
「じゃあ今年一年一緒に頑張ろうね」

「今度は絶対勝つニャ。その余裕そうな表情を歪ませてやるにゃぅぉぁ」
ケモ耳って、なんでこんなに癒されるのだろうか。
ああ、ずっと触っていたい。
「ん」
リニアのケモ耳を堪能していると、プルセナが頭を突き出してきた。
何だろうか。あ、ピコピコした耳可愛いな。
「撫でて」
「――っ！」
この後、先生が来るまでめちゃくちゃ撫でまくった。

リニア達は授業を受けに行った。
どうやら彼女たちは授業免除ではないらしい。
一人になった私は、目的を果たすべく図書館に赴く。
そこには膨大な書物が収まった棚が所狭しと並んでいた。

この世界の本は高価だ。
こんな無防備に置いてあって誰かが盗んでいかないのだろうか。
司書さんに魔術の本棚の場所を教えて貰うと、タイトルを一通り見ていく。
ずっと見て行くと、目を引く本を発見した。
『魔力結晶から人体への魔力の取り込み及び魔力回復について』
研究結果次第では、私の魔力総量を増やすことができそうだ。
これ程研究材料としてピッタリのものは無いだろう。
私はその本を手に取り、図書館で読み耽った。

―――

「……」
本に書かれていたのは、非常に困難だという事だった。
魔力結晶に含まれている魔力は、自身の魔力とは勝手が違う。
例えば、相手の魔力で勝手に魔術を使えたりはしない。
相手を操って使わせることならできるだろうが、決して相手の魔力で魔術を使う事は出来ないのだ。

それと同じで、魔力結晶の魔力を魔法陣に移動させることはできる。
しかし、それを自分の体内に操作して自分の魔力に出来たりはしない。
あくまで動かせるだけだ。
私の本体なら魔力結晶から魔力を取り出して、外部魔力にしてしまえばいいのではないか。
別に体内に取り込まなくても外部で保存する方法があるのだから。
これはできそうだ。
やってみなければ分からないけど。
私はどうだ？
魔力体の私なら、体内に魔力を取り込み、己の魔力に変換できたりしないだろうか。
そういえば、私専用の研究室がもらえるんだった。
魔力結晶を買って来て、そこで色々試してみよう。
もしできたなら天変地異を起こせる程度には魔力が回復できるかもしれない。
うん、今から市場に行って買ってこようか。
時間は有限だ。

第十八話「魔眼」

メデューサ討伐から十日が経った。
太陽が顔を出し始めた頃、私はようやく迷宮を脱した。
潜った時間よりも短縮できたが、それでも長い。
もう一生分の迷宮を堪能した気がする。
此処がリングス海の中心と仮定すると、どの方角にも大陸があるということになる。
どちらが北かも分からない私は、適当に目視した場所を起点に転移を繰り返していく。
二時間くらい経つと、大陸が見えてきた。
赤茶けた乾いた大地に枯れた木々。
その特徴的な大陸は、この世界に一つしかない。
……魔大陸だ。
一番行きたくない四分の一の確率が当たるのか。
まあ、いい。
キシリカはこの大陸に必ずいる。

魔眼を貰うために探そう。
原作を思い出しながら、特に急ぐ用も無いので、ゆっくりと大陸に渡った。

待ち往く人達は、角が生えていたり翼が生えていたりする人達が多く見られた。
当初の予定では冒険者ギルドに行き、旅の資金を集めながらキシリカを探そうと考えていた。
だが、それを実行する上である致命的な問題が浮上した。
――私、魔神語覚えてないじゃん。
使う機会などないと勝手に思っていたので、ロキシーにも習っていなかった。
ルディはロキシーから貰った本で覚えたかもしれないが、私はそんな本を貰っていない。
あんな地方の村ではロキシー以外に魔神語を使う人間なんて居るはずもなく。
「……まあ覚えるしかないんだけど」
私はまず宝石の看板を掲げている店に立ち寄った。
そして以前寝ていて生まれた高純度の大きな魔力結晶を売り払った。

勿論籠っていた魔力は外部に移動している。
言葉が分からなかったので詐欺られた可能性もあるが、黄金の杖と私の体から漏れ出る黄金の威光で脅しておいたので多分大丈夫だ。
鉱石のような銭がびっしり詰まった袋に魔術で結界を張り、スリ対策も施しておく。
冒険者のがっちりした装備の男たちについていくと、冒険者ギルドのような所に辿り着いた。
絡まれると面倒なので、光学迷彩魔術と、消音・消臭魔術で完全に姿を消す。
あとはギルド職員さんの直ぐ傍で文字を読み、言葉を聞き、言語を組み合わせていく。
陽がくれたら宿へ行って眠る。
そんな毎日を、延々と繰り返した。

この二ヶ月、ただ長かった。
殆ど分からない言葉を理解できるように、朝から晩まで聞き続けるのは中々に苦痛だった。
しかし前世で言語の勉強をしていたお蔭で、なんとか二ヶ月で魔神語をある程度話せ

るようになった。
魔力結晶を売った時のお金はまだ随分残っている。
それだけ私産の魔力結晶は価値が高かったようだ。
決して脅したから高く売れたわけでは無いと思う。

一応、冒険者登録をした。
旅の資金はあるが、取り敢えず持っておこうと思ったからだ。
職業は自分で書いたものが表示されるので、大魔術師と記入しておいた。
ギルドに居た冒険者や職員さん達から暖かい眼で見られた。
解せない。
その日、占命魔術でキシリカの居場所を占う。
脳裏に浮かんだのは、知っている町の裏路地で知らない男についていくキシリカの姿。
それを偶々発見した私が浮かんだ。
場所は、この町の大通りの脇道に反れた場所だ。
というかこれ数分後の未来じゃ？
走って行くと、そこには浮かんだイメージの少し前の光景がそこにはあった。

「ぐへへ。お嬢ちゃん、礼は要らねえ。良い飯を奢ってやるよ」
「本当か！　うむ、では案内せい！」
いや絶対いかがわしい事させるつもりでしょ。
睡眠魔術で下品な男を昏倒させる。
私が来なかったらしっかり魔眼で抗えたのだろうか、この幼女は。
「あの、飯なら私が幾らでも奢らせていただきますよ。魔眼大帝様」
「お、おお？　その年で妾の事を知っておるとは小娘の割にやりおるのう」
「そうですか？　十二の魔眼を操り配下に授ける偉人を知らない方はこの大陸には居ないと思いますが」
まあ本当の姿を見たこと無い人にはこの幼女が魔眼大帝だとは思わないだろうけど。
「ん？　小娘その鎧、というかどうなっておるのだその魔力！
おまえ、めっちゃくちゃじゃのう！」
いきなり大声を出したと思えば、キシリカはぐるりと青色に変化した瞳で驚愕している。
それが魔力眼なのか。
どう見えるのか気になるな。
「私の魔力って、魔力眼だとどう見えるんですか？」

「うぅむ、魔力の塊が小娘を中心にもっさりくっついておる。
魔力量はラプラスのそれとは比べ物にならん。
それを体外で維持するとか、危険すぎじゃろ！」
「そ、そうですか。それじゃあ、食べに行きましょうか」
「……うむ。――久々に腹一杯になるまで食べるぞ！」
キシリカが頭あまり良くなくて助かった。
でも鎧の事知ってそうな雰囲気だったな。
食べ終わったら聞いてみようか。

――――

「くはぁ。久し振りにたらふく食ったわ」
「……そうですか。それは良かったです」
私の一週間分の食費があっという間に消えてしまった。
魔眼を得る必要経費だと思えば安いものだが銭がポンポン消えていくのは虚しい。
「小娘、そういえば名前を聞いておらんかったのう。名を名乗れ」
「あ、申し遅れました。サラスヴァティ・グレイラットです」

「グレイラット……？　おお！　小娘、ルーデウスという名を知っておるか？」
　ああ、ルディはもう魔眼大帝に会っていたのか。
「ルーデウスは双子の兄ですよ」
「双子揃ってイカレタ魔力とは、親の顔が見てみたいわい。
　――それで、それ程の強さをもってしても、妾の魔眼が欲しいのか？」
　あ、普通に魔眼目当ててバレてたわ。
　まあ、人間がそれ以外に自ら無償で飯を食わせる理由なんて無いだろうし当然か。
「はい。私は魔術を極めたいので、魔眼で少しでも強くなれれば本望です」
「そうか。それが理由なら妾の魔眼が欲しいじゃろうな。何の魔眼が欲しい？」
　それは此処二ヶ月でもう考えてある。
　私が選ぶのは、
「予見眼を二つ下さい」
「――確かに両目同じ魔眼にすれば能力は向上するが、上手く制御できねば頭がおかしくなるぞ？」
「……因みに、放出した魔力を常時操るのとどっちが難しいですか？」
「どっちも同じくらい難しいじゃろ、まあえーわ。
　そんな魔力制御できるんじゃし大丈夫じゃ大丈夫っ、ほれすぶしゅー」

考え込んでいた所をキシリカが突然両目に指を突っ込んだ。
脳が完全に思考停止して、何も考えられなくなった。
「あの、今どうなってます?」
「右目が取れたぞ、あ、左目も取れた」
「分かりましたけど、もうちょっとオブラートに包んで下さい」
「おぶらーと? なんじゃそれ。……ほい、完成じゃ」
神経が麻痺している間に魔眼が入れ替え終わったようだ。
痛みが無くて良かったけど。
目を開けると、何重にもブレたキシリカの姿が。
魔眼に循環する魔力を抑える。
ブレが少しだけ収まった。
「……ありがとうございます。それと、この鎧について教えて貰えませんか?」
「持ち直し早いのう。その鎧か? それは闘神鎧というやつじゃ。正式名称は忘れたが、妾の現フィアンセのバーディガーディがラプラス戦役の時着ておったな」
バーディガーディって闘神だよね。
何か分からないけど原作で重要になりそうなアイテムをとってきてしまったかもしれない。

「そうなんですか」

「――そうじゃっ、妾はバーディガーディを探しておったのじゃ！　サラスヴァティよ感謝するぞ！フハハハハハ、フワァハハハハゲホゲホッ」

……。

まあいいや、魔眼も手に入れたし。

頑張って慣らしておこう。

その後、なんとか人にぶつからないよう空を飛んで宿に帰り着いた。

第十九話「龍神」――裏――

市場を散策した。
魔法大国なだけあって、すぐに良質な魔力結晶は見つかった。
帰り道、魔力結晶内部にある魔力を取り出してみる。
久し振りに外部魔力と同じ要領で周囲に漂わせる。
その懐かしい感覚に、思わず頬が緩む。
後はこれを、魔力体に吸収させるだけなのだが……。
「お前、――止まれ」
通りすがりの男に話しかけられた。
銀髪で偉丈夫の冷たい眼をした男だ。
その後ろには、黒髪の女性。
「何ですか？」
「――貴様は何者だ？」
初対面の相手にそれはどうなのだろう。
自分から名乗ってくれたらこっちも普通に名乗るのに。

しかし、何故話しかけられたのか。
「人にモノを尋ねるのなら、それなりの態度があるのではないですか？」
「……すまない。俺は百代目龍神オルステッドだ。それで、お前は何者だ？」
お、おお??　や、やばいんですけど。龍神に出会っちゃったんですけど。
よりにもよってこのタイミング？　何も考えてなかった。
「龍神様でしたか。私はサラスヴァティ・グレイラット、しがない魔術師です」
「……。グレイラット、アスラ王国の地方の貴族だったか？　……まあいい。その体は何だ？　お前は生きているのか？」
質問攻めだな。
魔力体に目をつけられたか。
まあ、言ってもいいか、敵ではないんだし。
「龍神様の慧眼おみそれいたしました。私はサラスヴァティ・グレイラットの分身体です。本体が、といっても私もその記憶がございますが魔術の失敗をした時に偶然生まれた魔力体が私ですね」
「……失敗で生まれたのか。一体何の魔術を行使した？」
「転移魔術です」
「――何だと？」

転移魔術ってオルステッドでも使えなかった魔術だっけ。
老デウスが使ってたから使えるものと思っていたけど。
と、そんなことより今が龍神に取り入るチャンスではなかろうか。
オルステッドは常に動き回っている。
このチャンスを逃すと次いつ会えるか分からない。
「龍神オルステッド様、私を貴方の陣営に入れてくれませんか？」
「……俺が何を目的としているか、知っているのか」
「ええっと、人神の封印及び殺害でしたっけ？」
「殺害だ。だが、何処で聞いた」
剣呑な雰囲気が漂い始める。
今にも殺し合いが始まりそうな雰囲気だ。
一度、場を改めよう。
「その話も含めて、場所を変えて話をしましょう。長くなりそうですし」
「ちっ、いいだろう。場所は任せる」
私の後をついてくるオルステッドと黒髪の女性。
彼女がナナホシなのか、懐かしいアジア人の顔だ。
場所は、私の研究室でいいか。

さて、どうなることやら。

――――

研究室に着いた。
まだ何も置かれていない、私専用の研究室だ。
魔力結晶から取り出してあった外部魔力で椅子とテーブルを生み出す。
「この通り、罠どころか物も置かれていないので安心してください」
「……」
『失礼します』
ああ、ナナホシさんまだ日本語しか話せないのか。
道理で黙ってばかりだと思った。
『どうぞ』
『――え？』
『これから何かと話す事になると思うから、よろしくね』
ナナホシは驚いた顔で固まっている。
まあ異世界で日本語ペラペラ話す人間が居たら驚くよね。

彼女には色々迷惑になりそうだから、しっかりと話しておこう。
「……何を話している。ここまで来たんだ。早く説明しろ」
「はいはい、分かりましたよ。一から説明してあげます」
「っ」
何か言いたげなオルステッドを無視して、話し出す。
前世の世界でのことと、この世界に転生したこと。
何故私がオルステッドの目的を知っているのかを。

「成る程、お前は異世界人で、この世界のあらましを途中まで読んで知っていると」
「限定的にですけどね。その物語は私の兄の視点で描かれたものですので、兄が知らない事は基本的に知りません」
「ルーデウス・グレイラットか。……お前が俺に話す事で物語とは致命的にずれたと思うが大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃありません。ですから私に出会わなかった通りに行動してください。そうすれば変な事にはならないと思います」

オルステッドは私の居ない世界の事を知っている。
だから、私が嘘をついていない事もよく分かっているだろう。
「……嘘はなさそうだな。それで、お前は俺の陣営に入って何がしたいんだ？」
「人神の殺害を手伝いましょう。私はまあ、あまり役には立たないと思いますが、本体の方は人神に対抗するために強くなっているはずなので」
「そういえば、お前は本体じゃないんだったな。本体は今何処で何をしているのか分からないのか？」
「繋がりはあるので方角くらいは分かりますが、その程度です。本体はナナホシさんの転移事件の被害を最小限に抑えようと自ら召喚魔術に巻き込まれたので、何処かに転移していますから私にも予測不可能です。方角的には東に居ますね」
「まったく、めちゃくちゃだな、お前の本体は。いいだろう、お前も陣営に入れてやる。本体は会った時にでも話しておこう。何か他に要望はないか？」
「大丈夫です」
はあ。何とか話が纏まって良かった。
原作に介入なんてするものじゃないな。疲れるだけだ。
これで間接的に本体の役に立っただろう。
私ってば、やればできるじゃん。

話が終わるとオルステッドはナナホシを連れてすぐに出て行った。
私と会った分の時間を補い物語通りに行動を進める為だ。
窓から覗く太陽はゆっくりと降り始めている。
今日は疲れた。
魔力結晶の操作は明日でいいかな。
私は魔術で生み出したイスとテーブルと魔力に変換し、外部に貯蔵した。

第二十話「帰郷」

キシリカから魔眼を得た翌朝。
私は宿で予見眼の制御をしていた。
《立ち上がって杖を持つ》
《何もしない》
《立ち上がれず倒れる》
一つの動作をしようとするだけで複数の未来が視える。
私は立ち上がって、倒れた。
どうやら三番の未来にいきついてしまったらしい。
立ち上がることすらまともに出来ないのは、私の視覚が関係している。
私は両目とも予見眼にした結果、現在を視る事が出来なくなった。
視えるのは未来の視界で、現実の少し先の映像だ。
ルディは片目だけなので現実を視ることができた。
だが私は両目、現実を視る眼を持っていないのだ。
まあ、肉眼の視覚に頼らなければ案外普通に行動できるのだ。

解析魔術で周囲の空間を視覚化して視ることもできる。
実際これで昨日宿まで帰ってきた。
しかし、これを使えこなせなければ、魔眼を得た意味が無い。
私は、予見眼で普通に生活できなければならない。

私は船に揺られ、０，１秒先の未来の離れ往く魔大陸を眺めていた。
今日は普段より風が緩やかで、旅立ちにぴったりの日だ。
暖かな太陽に照らされて、欠伸を一つ漏らす。
私が予見眼の能力を実用レベルにするには、丸三日を要した。
とはいえ、問題は初日で解決した。
大体０，１秒後の未来を視る事で、現実との誤差を限りなく減らしたのだ。
元々私達が視ている視界の映像は、現実に近い過去である。
その分未来を視る事で視覚情報のタイムラグを減らし、限りなく現実に近い未来なので分岐も殆どなく普通に生活できるようになった。
残りの二日は、その状態に慣れるのに要した時間だ。

さて、そうして魔眼を手に入れたので、私が魔大陸に居る必要もなくなったわけだ。
なので私は一度、ブエナ村に帰ってみる事にした。
私があれだけ溜め込んだ魔力をぶち込んだのだ。
多分残っている、と思う。
一日と少しでザントポートに到着した。
丁度雨季が過ぎ、聖剣街道が通れるようになっていた。
前世でよくテレビを観ながら一度はやってみたいと憧れた旅。
まさが今世ですることになろうとは思いもしなかった。
馬車に乗り換え、大森林を満喫、する。
……そして、二週間で踏破した。
初めは楽しく旅をしていた。
様々な種族が次々と現れ、それぞれ村にも特色があった。
が、いつまで経っても周りは木、木、木。
確かに楽しいけど、ずっと同じ景色じゃ旅してる気がしないんだよね……。
森を抜けると青竜山脈に入った。
私は久し振りの森以外の景色に歓喜し、馬車の屋根に浮き出る。
透き通る空、聳え立つ山々、空を飛ぶ青竜。

あ、あれ、あの青い竜こっちに突っ込んでくるんだけど？

《青竜が口から水弾を飛ばす》

片方の数秒先を視る眼に面倒な未来が映る。

――少し、間が悪すぎじゃない？

魔術無効化魔術を飛ばし、原因となる青竜の翼の風魔術を無効化。

青竜はパニックになりながら落ちていった。

「……はぁ」

私が居なかったらこの馬車が吹き飛んでいた所だ。

「おぉ、青竜何で落ちてやがんだ？」

馬車の御者が落ちていく青竜を見ながらそう呟く。

未来を知らない人は呑気なものだ。

「普段青竜が襲ってきたときどうしてるんですか？」

「お、おぉ？　はっはっは、青竜は襲ってこないんだぜ？　山に踏み入れば襲われるかもしれんが、山道を走っていれば滅多に襲われねぇ。偶にイラついてんのか水弾を打ってきたりするけどな！　しっかし嬢ちゃん空飛べんのかよ！　最近の魔術師すげえな」

「ふふ、これでもすごい魔術師なので」

こうしてふとした瞬間に褒められると嬉しいな。

それにしても、青竜襲ってこないのか、はっはっは、そういえばそんなこと聞いた気がする。
だから護衛が一人もついていないのかー。
……そのイラつきで吹き飛ばされたらどうするつもりなのか問いただしたい。

ミリス神聖国に到着した。
ここはミリシオン、世界で最も美しい都市とされている場所だ。
白と銀で創造された街並みは静謐さを感じさせる。
そういえばゼニスはミリス教徒だった。
確かにこの光景を観れば信仰する気持ちも分かるかもしれない。
私は日本によくいる適当な信仰者なので、取り敢えず信仰しておく。
魔大陸のお金が使えなかったので、また宝石店に向かった。
リュックから迷宮の最深部で得た財宝を取り出す。

「ま、またのご来店お待ちしておりますぅう」

私を子供とみて安く買い叩こうとした店主を魔術で説得した。

店主は魔術に精通していたようで、私の魔術を視ると即座に通常以上の値段で売ってくれた。

まあ相場は分からないので、あくまで店主の言っていた限りでは、だが。

今更だが、実は私の背負っているこのリュック。

ダンジョンの最深部にあった魔道具の一つだったりする。

効果は空間の拡張で、簡単に言えばアイテムボックスのような役割だ。

どれくらい入るかは分からないが、宝箱の中身を全て入れても大丈夫だったので結構入ると思っておけばいいだろう。

ミリス神聖国に冒険者ギルドの本部があった。

中央大陸北部や魔大陸に本部があると思っていたけど、まさかミリス大陸とは。

やはり安全で魔物が弱い大陸に本部を置くのだろうか。

私の冒険者カードには、未だにFの文字が輝いている。

フィットア領の様子を見てきたら、一度冒険者をしてみるのもいいかもしれない。

半年が経った。
ロアの町に着いた。
町は、消失していた。
何がいけなかったのだろうか。
私の魔力が足りなかったのか？
いや、魔法陣の払い戻しの結果、人の転移事件が起きた。
魔力が足りた場合、町も払い戻しの対象になり、結局無くなってしまうのか。
愕然とした。
人が魔力に変換されるのを防ぐためにやったこととはいえ、町は残ると思っていた。
無駄とはいえないが、良かったとも思えない。
臨時に建てられた冒険者ギルドに来た。
本来依頼が貼り付けられている掲示板に、死亡者行方不明者の名前がずらりと並んでいた。
ノルンとパウロは大丈夫だ。
ゼニスは、ダンジョンにいるが、私の結界で精神は守られているはず。
リーリャとアイシャは、ルディがどうにかする。

私は、元気だ。
伝言板に移動すると、パウロの伝言を発見した。
『ルーデウスへ。
ゼニスとリーリャ、アイシャ、サラスヴァティが行方不明だ。
ノルンは俺が保護している。
お前が現在どこにいるかはわからん。
だが、お前なら一人でもここに辿り着けると考えている。
よって、お前の捜索は後回しにする。
オレはミリス大陸へと行く。
そこがゼニスの生まれ故郷だからだ。
リーリャの故郷・実家にも伝言を残しておく。
お前は中央大陸の北部を探せ。
見つけたら下記まで連絡を。
ゼニス、リーリャ、サラスヴァティも同様に連絡を。
また、オレや家族のことを知る人物、あるいは元『黒狼の牙』メンバーへ。
捜索を手伝って欲しい。
『黒狼の牙』の元メンバーは俺に思う所もあるだろう。

水に流せとは言わない。罵ってくれてもいい。
靴をなめろというなら舐めよう。
財産は全て消えたので報酬は出せないが、頼む。
オレの家族を探してくれ。
―　連絡先　―
ミリス大陸ミリス神聖国首都ミリシオン冒険者ギルド
パーティ名『ブエナ村民捜索隊』
クラン名『フィットア領捜索団』
パウロ・グレイラットより』
あ、完全にすれ違ってる。
ロキシーとも会わなかったし、またミリス大陸まで戻らなければならないのか。
こういっては何だが、めんどくさい。
半年も掛けて戻ってきたのにまた半年も掛けて戻らなければいけないなんて。
もうちょっと学習しよう私。
転移の起点になるものを置いてこれば一瞬だったのに。
取り敢えずロアの町に魔力結晶を埋めていつでも来れる様にしておこう。
あとは、ブエナ村だ。

魔術で飛び、数十分でブエナ村に着いた。
一年振りに見る景色。
村は、消えていなかった。
安堵と、何故という疑問が浮かび上がる。
何も分からないまま、自宅へと進んでいく。
自宅が見えた。
庭は草がぼうぼうで、無法地帯のような有様だ。
風魔術で草を刈り、敷地の外で燃やす。
屋敷の扉を開けた。
玄関に入ると同時、むわっとした埃の臭いが鼻を刺激する。
リーリャが居ないので、屋敷の中は埃でコーティングされていた。
埃も風魔術で家の外に掃き出す。
家中を歩き回る。
全て転移する直前の状態のままで、時間が巻き戻ったような違和感を感じる。
結局、何も見つからないまま、時間が過ぎて行った。
村と草原の境界を歩いていく。

そこを辿れば、何かが分かるかもしれない。
村の外れを境に、何もない『草原』になっていた。
その境には、見覚えがある。
「……私が、最後に居た場所」
転移する直前、私は村の外れで魔術イメージの限界を調べていた。
その場所から、後ろのブエナ村は、転移の被害に逢っていなかった。
そう、か。
被害は赤い珠を中心に広がっていたんだ。
だからロアの町は消えて、私の背後にある村は残った。
私が巻き込まれると同時、足りなかった魔力が足りて、被害範囲がそこでストップした。
そういうことなら、転移事件の時にロアの町に居れば、被害は限りなくゼロにできたかもしれない。
でも物語を沿うなら、ルディやシルフィには転移してもらわなければいけない。
……知らなかったのだから、罪ではない。
転移事件の被害は、物語を知っていても、止めることができないものだったのだ。
地方の村を、幾つか救ったのだ、それで十分だ。

そう思わないと、やっていけない。

私は一年ぶりの屋敷で、一夜を過ごした。

第二十一話「再会」―　裏　―

一年が経った。
半年前に、天候の操作が出来る様に戻った。
魔力結晶から魔力を抜いて外部に溜め込み続けた結果だ。
魔力体に入れることはできなかったので、結局外部に置いておくことにした。
これで戦闘時に行使したい魔術が使えなくてムズムズすることもなくなった。
……本体がどれほど強くなったか気になるなぁ。
そして最近、オルステッドが会いに来た。
私が研究室を重力魔術で無重力状態にして浮いていると、興味津々な顔で突然部屋に入ってきたのだ。
女性の部屋に、研究室とはいえ無断で入って来るのは良くない。
私オルステッドに注意ばかりしているなと思いながら忠告してやると、鼻で笑われた。
曰く、私は女とは思えないとのことらしい。
何て失礼な男なのだろうか。

取り敢えず無言で重力で押し潰した。
……相当なGを掛けたはずなのに何で平然としていられるのか。
せめて謝らせたかったのだが、床がメキメキ音をたて始めたので止めた。
部屋が壊れて修理するのは私だ。

本当に突然の事だったので、何かあったのかと聞いた。
彼は人神関連で近くに来たので、予定が狂わないようにしてから態々立ち寄ったそうだ。
話を聞いてみれば、大陸を何周かしたが本体には会わなかったという。
繋がりを確認してみると、南にいる事が分かった。
フィットア領に被害の様子を見に帰ってきたという感じだろうか。
それを伝えると、丁度その辺りにも用があるので探してみるそうだ。
帰り際、次いつ会えるか分からないからと、腕輪の通信機を貰った。
これで態々会いに来なくても話すことができるようになったという。
本体ではなく私と話してどうなるのかという話なのだが。
まあ気にしない事にした。
そして今日は新入生が入学する日だ。

物語の登場キャラの誰かが来るのかな～と呑気に考えていると、研究室の扉をコンコンッとノックする音が。
「どうぞー」
「失礼します」
そう言って入ってきたのは、何処か見覚えのある面影の少年。
髪は白色だし眼も隠されているが、そのサングラスを掛けた姿に思い至る。
「わぉっ、シルフィ？　久し振りだね」
「ひ、人違いじゃないですか？　ボクはフィッツですよ。先輩」
「あはは、それならそういうことにしておこうか。それで、新入生のフィッツ君が何の用なの？」
そういうと、シルフィはスッと姿勢を正して真剣な雰囲気に変わった。
私の知るシルフィは4年以上も前のものだが、これ程成長しているとは。
嬉しくもあり寂しくもある。
もう昔の様に甘えてくれたりしないのかな。
「アリエル・アネモイ・アスラ様がSランク冒険者『妖精サラスヴァティ』である貴女に是非、お会いしたいと仰っておりますので、今夜時間がおありでしたら、アリエル様の寮のお部屋に訪ねて来てください」

アリエル・アネモイ・アスラは、アスラ王国第二王女で王位継承権第三位くらいだったか。
シルフィが転移直後に助けた女の子だろう。
流石にSランクはやりすぎたかな。
有名になって魔法大学に入るつもりだったからなったんだけど。
「また会おうね」
「…うん」
フィッツ、もといシルフィは、私の言葉に少しだけ頷くと、研究室を後にした。
少し照れたように言う感じが可愛すぎる。
彼女は天使だったか。
そこで魔石の解析に戻ろうとした私は、ある事実に思い至る。
もしアリエルが私の過去を調べているとしたら、シルフィとの関係で私が同時期に二つの場所にいることが丸分かり？
お、おお。落ち着くんだ私、別にオルステッドの時のように分身と言えばいいではないか。
いや分身体でSランク冒険者の実力とか思われると更に厄介なことになる。
それにシルフィに私が本体と記憶の共有をしていないことがバレると拒絶されるか

も。
いやシルフィはそんな子ではないか。
だが、そもそも分身体を生み出す魔術なんて聞いた事も無い。
オルステッドですら知らないと言っていた。
そんな魔術存在しないと考えた方がいい。
私は基本独学だからイメージで存在しない魔術でも何でも使えるんだけど。
それは常識的ではない。
私は原作にあまり関わりたくないんだけど、仕方ない。
本体の為に一肌脱ぐとしよう。

――――　シルフィエット視点　――――

入学式が始まる少し前、アリエル様とルークで話をしていた。
「シルフィ、本当に『妖精サラスヴァティ』と面識があるのかしら？」
「ある、と思う。サラスヴァティって珍しい名前だし、グレイラット家だし」
「だが、転移事件の三年前からこの王国で目撃情報があるぞ。別人じゃないのか」
そういうのはルーク。

まあ普通に考えたら別人に決まっている。
ボクだってそう思う。
転移事件の数日前もサラと一緒に裁縫をして遊んだのだ。
その頃にラノア王国で冒険者をしているのだから、別人だろう。
でもグレイラットを名乗っているし。
記事で書かれている容姿もサラとぴったり合う。
一人で朝早くから魔術の鍛錬をしているのもまったく同じだ。
「……アリエル様はこの人を味方につけたいんでしょ？」
「できればそうしたいのだけどね。彼女は三年前から一度もラノア王国から出ていないという話だし。政敵である可能性は低い。ただ、彼女が何を考えて行動しているのか分からないのよ。お金はもう散々稼いでいるし、知名度は冒険者の中でも魔法三大国随一。発言権を強めているかと思えば政治的な方面はノータッチ。去年ラノア魔法大学に入学したけど、それも推薦がきたから。訳が分からないわ」
「それなら、一度会って話をしてみてはいかがでしょう。実際に話してみれば何か分かるかと思います」
確かに、ルークの言う通りだ。
一度顔を見合わせて話をすれば、大抵どんな人物か分かるものだ。

ボクもこの人がサラかどうか分かるだろう。
「……そうね。Ｓランクの魔物をバンバン倒すＳランク冒険者相手にあなた達二人だと護衛が心もとないけど、噂を聞く限り突然襲ってきたりはしないでしょうし。シルフィ、あなた今から今夜用がなければ寮の私の部屋に来るように伝えて来なさい」
「ええ!?　今から?」
「そうよ!　こういうのは早めに行った方が良いわ!　入学式まで時間が無いから早く行ってきなさい!」
「わかったよう。いってきます」
泊まっていた宿屋から駆け脚で出ると、そのままラノア魔法大学に走った。
門番に止められたけど、名前と此処に来た理由を言うと、普通に通してくれた。
今日から入学する予定だったので入れたのだろう。
歩いている職員にサラスヴァティ・グレイラットが何処に居るのかを聞くと、すぐに答えが返ってきた。
ついさっき、中庭での朝の鍛錬を終えて研究所に歩いて行く姿を見たらしい。
場所を聞いて短く感謝を述べると、その場所に向かった。
僅かに緊張しながら、意を決して研究所の扉を叩く。
「どうぞー」

「失礼します」
扉の先に居た人を見て、すぐにサラだと気づいた。
健康的で程よく引き締まった体つきに、力に満ちた優しい眼をしていて、サラのお母さんによく似て美人な顔立ち。
そして、部屋全体の重力を操作しているのか天井に座りながら魔石を弄っているその魔術技能。
転移前でもおかしいとは思っていたが、相変わらず常識を凌駕した私の親友が、そこに居た。
「わぉっ、シルフィ？　久し振りだね」
あ、あれ？　なんか軽くない？
というか、ボク今男装してるのに、一瞬でバレたんだけど。
気づいてもらえて嬉しいけど、男装しても髪の色が変わっても気づかれるボクの変装能力が悲しい。
ってそうじゃない、バレちゃいけないんだった。
「ひ、人違いじゃないですか？　ボクはフィッツですよ。先輩」
「あはは、それならそういうことにしておこうか。それで、新入生のフィッツ君が何の用なの？」

そうだ、時間が無いんだった。
要件を伝えて、早く入学式が始まるまでに戻らないと。

―――

「どうだったかしら」
「あ、うん。否定してなかったから多分来ると思うよ」
「……同一人物だったか？　転移事件前のそいつと」
「うん。ボクの姿を見て一瞬でシルフィだって気づいたし、昔から重力魔術が得意で当たり前のように浮いてたのも同じだった」
　あれで別人っていうのならもう誰にも見破れないんじゃないかな。
「重力魔術ってちょくちょく聞くがそんな魔術あるのか？」
「私も聞いた事ないわね。噂でも普通に空飛んだりして戦うらしいし。シルフィは使えないの？」
「使えないよ。原理が良く理解できないと無理みたい。でもルディは使えるよ。サラの双子の兄の」
「またルーデウス。しかも双子だったのねサラスヴァティと」

ルディは今頃どこで何をしてるんだろう。
ルディの事だから生きているだろうけど。
カッコいいし強いから、もう他の女の子とくっついていてもおかしくない。
――そうだ。サラならルディが何処に居るか知っているかも。
「サラが安全と分かったら、ボクの正体を伝えてもいいかな。親友だし秘密にしてくれると思う」
「……仲間に取り込むなら正体を伝えた方が効果的だしいいんじゃない？　まあ、今夜彼女がどう出るかで決まるわね」
そうして、ボクらはラノア魔法大学の入学式へ向かったのだった。

第二十二話「傘下」

フィットア領捜索団に手紙を出すことにした。
私の無事を知って、パウロも少しは安心してくれると思う。
事前にゼニスに高度の結界魔術のネックレスを渡していた事を書いておいた。
私は両親が不幸になってほしくはない。
また以前の様に、このブエナ村でのんびり暮らしていて欲しい。
そのためには労力を惜しむつもりは無い。
原作では二人共、救われない最後だった。
そんな未来は、私が認めない。
占命魔術でルディが魔大陸に居る未来を視たことも書いておく。
もし会ったら、怒らないでやってください。
ルディもルディなりに、頑張ってきたはずだから。
最後に、家族全員無事に生かす心意気を書き留める。
屋敷にあったグレイラット家の便箋に入れ、郵便局に出した。
なんとか配送機関がいきていて助かった。

ロアの町がきれいさっぱり消えているので、少しだけ届くのが遅くなるかもしれないけれど。
一年の内にはパウロの手元に届くだろう。
それから数日、ブエナ村の手伝いをしながら休暇を過ごした。
一年も旅を続けていたのだから、少しくらい休んでも良いだろう。
今後の予定はまだ何も考えていない。
ただ、それ以外何もしていなかったわけではなく。
魔力壁改め魔力障壁を身体に馴染ませる形で作り直し、肉体的な防御力の向上をしたりもした。
闘神鎧はあくまで鎧が硬いのであって、中の人が脆ければ衝撃に耐えきれず死んでしまう。
そもそもそんな攻撃をくらうつもりなどないのだが、もしも受けざる終えなくなった場合、死んでしまうのは拙い。
闘気は正直よく分からないので、身体を障壁にしてやった。
これなら闘神鎧を通った衝撃にも耐えられる。
人神対策の魂を隠蔽する能力も失っていないので、完全に上位互換だ。
試しに強い衝撃波を近くに起こしてみた。

バンッという音と共に、全身に衝撃が奔った。
体は衝撃が起こった反対方向に吹っ飛ぶ。
地面に叩きつけられる前に重力と風で速度を遅め、華麗に地面に着地した。
三次元駆動の鍛錬をしておいて良かった。
あれ程の衝撃を全身に受けたのに、痛くもかゆくもない。
軽く何かが触れたかな程度の衝撃だ。
それでも普通に自分の体を触れば、いつもの同じ感触が返ってくる。
闘神鎧のお蔭もあるかもしれないが、これは凄い。
ふと見ると、銀髪の冷たい眼をした男が此方を見ていた。
村にはあのような人物は存在しない。
人神に私の存在がバレたか？
魔力壁を魔力障壁に変化させたからバレてはいないと思うけど。
解析魔術を使うか。
「面倒なことはするな。俺はお前の仲間だ」
「いや面倒って、お生憎、私はあなたのことは知りませんが？」
そう言いながら近づいてくる男を両目の予見眼で数秒先を視ながら、解析魔術で現在の視界を得る。

《男と会話をする》
《束縛魔術で拘束する》
相手が攻撃してくる様子はない。
というか束縛魔術を避けようともしない。
少なくとも話をするだけなら危険はないだろう。
「俺の名はオルステッド。お前の分身体から話は聞いている」
「お、オルステッド！　龍神の？」
私の返答に、奴は頷いた。
分身体って、向こうの私何処で何やってるの？
いつの間にオルステッドの仲間になっちゃったわけ？
それは時間の問題だったから別にいいけど、私何も知らないんだけど。
「あっちの私から何処まで話を聞いてるの？」
「転生から人神討伐の為に力を蓄えている所までだな。お前の兄の事も聞いている」
それ全部話してるよね。
私がしなきゃいけない事、凄いやってくれてる。
オルステッドが一番難関だと思っていたのに、何か知らない間に解決してるんですけど。

流石向こうの私、尊敬します。
「分身体も異常な魔法技術だったが、確かにお前の方が数倍技量が上だな。形は変わっているがその鎧、闘神鎧か？　その様子だと意識は乗っ取られていない様だが。転移時に回収して来たのか、やるな」
「は、はぁ。リングス海の中心に転移させられた時に、変な魔力を追って迷宮に潜ったついでに取ってきましたけど。予定の方は大丈夫なんですか？」
「ああ。此処に来たのも用事のついでだ。サラ、お前にこの腕輪をやる。通信機で、魔力を通すと俺に繋がる」
オルステッドから貰った腕輪を手首に通すと、自動で大きさが調整された。
「……そうだな。今からヒトガミの使徒を倒しに行くからついてこい」
「え？　今から？」
「そうだ。どの道ヒトガミを殺す為に力を蓄えているなら使徒と戦う事になるだろう。それなら早い方が良い」
そんなぁ。
私の休暇はどこに消えたのですか……。
というか人神ってヒトガミっていうのか。
原作でもそうだった気がする。

分身体が羨ましい。一体何処で何をしているのか。
「分身体の私は今何処で何をしているんですか？」
「この前は、ラノア魔法大学の研究室で魔石の集積化の研究をしていた」
何で、大学なんて、行ってるの！
ずるい。ずるいよ私！
魔石の集積化って何か凄そうな研究しているけど、私も行ってみたかった！
というかあそこ原作の重要起点だけど、そんな所に居て大丈夫なの？
原作変わったりしない？
……急に心配になってきた。
「――おい、行くぞ」
「はいはーい……」
それでもやっぱりずるいと思う。
私は不満をぐちぐちと呟きながら、オルステッドの後を追って、ロアの町に向かったのだった。

第二十三話「安堵」―　裏　―

陽が沈み数刻が経った頃。
私は冒険者として一狩りして、露店で食事を摂った。
魔物のソーセージをパンの生地に挟んだだけの簡単なホットドックだが、中々いける。
肉質的に、ホワイトグリズリーの肉だろうか。
こうして露店で街の人と触れ合いながら食べるのは楽しい。
たまに顔見知りと会って話をしたりとか、この町に住んで四年になるので私の顔は広かったりする。
食事を終えると、女子寮に向かった。
アリエル様の部屋に向かわなければならない。
一体何の目的で呼んだのだろうか。
原作知識でいうと、強力な助っ人という形で私を仲間に取り込みたいという感じか。
私が同時期に二人いる問題を指摘されたら、正直に話しておこう。
変に嘘をつくとアリエル様に敵対される可能性がある。

「サラスヴァティ・グレイラットです。フィッツ殿に呼ばれ、只今参りました」
「――入れ」
部屋に入ると、少しだけピリッとした空気に緊張してしまう。
初対面は重要だな。
「アリエル・アネモイ・アスラ殿下、お初にお目にかかります。私はサラスヴァティ・グレイラットと申します」
「いかにも、私はアスラ王国王女アリエル・アネモイ・アスラよ。今日は貴女に色々と聞きたい事があって呼んだの」
「はっ、殿下のご質問であれば何でもお答えいたしましょう」
前世の知識を引っ張り出して、最高位の目上の方に対する礼儀をする。
っく、リーリャに聞いておけばよかった。
何か最近後悔ばかりしてるような気がするな。
「ふぅん。流石ね。若くして家を出ている割には、最低限の礼儀はできるようね。どこで習ったのかしら」
「はっ、実家で習いました」
やはり、情報は知られているようだ。
できないふりをした方が良かったかな？

まあいいや。腹の探り合いは嫌いだし。
「あなたの経歴を教えて貰えるかしら」
「畏まりました。そうですね、まず、六歳まで実家で育ち、その後ロアの町に一人引っ越しいたしました」
「――何をっ「フィッツ！」……」
シルフィが異議を唱えようとして、騎士の少年に抑えられた。
まあ、事実なんだよねこれ。
「普通その年で家を出るなんてあり得ないと思うのだけど？」
「はい、私が六歳に家を出なくてはいけなくなったのには訳があります。
その頃私は、新たな魔術を習得しようと庭で魔術の練習をしていました」
「ろ、六歳で？」
「はい」
「……それが家出と何の関係があるのかしら」
「その新たな魔術とは、転移魔術でした」
皆が驚愕に目を見開いているなか、私は話を続ける。
「当然そんな魔術は使えませんでした。そして失敗を何度か重ねた時、幸か不幸か、魔術が中途半端な形で発動してしまったのです」

「……それでどうなったの？」
「私の目の前にはもう一人の私がいました。私はすぐに転移魔術に失敗に気づきました。その時から私は、二人になったのです。……これが、アリエル様がお聞きしたかった真実でしょう」
「え、え？」
「そして私は、生み出された方でした。本来、魔力の塊として生まれた私は、すぐに消えてしまう程の脆弱な存在でしたが、本体としての記憶も受け継いでいた私は、その魔力の体をなんとか固定しました」
心の中で煮詰まっていたものが放出されていく。
最高に心地が良い。
今まで誰にも言えなかった苦しい真実を、こうして打ち明けることができる。
シルフィに、知ってもらうことができる。
「まあ、詳しい話は置いておいて、その後、家に居られなくなった私は、数週間村の外にある森に滞在した後、ロアの町に向かいました。七歳となり、ラノア魔法大学の存在を知った私は、半年程かけてラノア王国に赴き、そこからラノア魔法大学から推薦が来るまで冒険者として成り上りました。その実が成り、一年前この大学に入学することができました。これが私の経歴です」

言い切った。
スッキリした！
今までオルステッド以外に誰にもいう事ができなかった事をぶちまけてやった。
今私は満面の笑みを浮かべているに違いない。
「……ありがとう。あなたの経歴については分かったわ。
中々に過酷な人生を送ってきたようね……。そこで一つ提案なのだけど、私の騎士にならないかしら」
「は、はい？」
「私はアスラ王国国王になるために今此処で優秀な人材を集めているの。
あなたみたいな最高の人材を見逃す気は無いわ」
やはりそう来たか。
私の予想は当たっていたようだ。
アリエル様の騎士かー。
カッコいいし、なってみたい気もするけどね。
「お断りします」
「……理由を聞かせて貰えるかしら」
「私は自由に研究して冒険者をする今の生活が気に入っています。それに、例えアリエ

ル様の騎士にならなくとも、アスラ王国一国民として一貴族として、協力致します。ですので、騎士になろうとは思えません」
「そう、それなら良かったわ。あなたが協力してくれるなら、私も無理に騎士にしようとは思わない。これからよろしくね、サラスヴァティ」
「殿下の期待に応えられるよう、精一杯協力致しましょう」
アリエルの差し出した手を、両手で握り返す。
思った以上に真面な判断ができる人で良かった。
まあ、シルフィが使えてる方だし聡明なのは分かり切ってたけど。
「フィッツ、もう正体を明かしても良いわよ」
「あ、ぅん……」
アリエルの言葉に不安げな表情で私を見るシルフィ。
「ボク、シルフィエットだけど、サラは、サラだよね？」
シルフィは不安なのか。
私が分身で、転移前まで一緒に居た本体じゃないから。
「私は私だよ。私からしたら5年振りに会うけど、ね。シルフィ覚えてる？　森の近くで剣を振ってた私の事」
「勿論！　あの時はよく魔術を教えてくれて、そのお蔭でボクは混合魔術が使えるよう

になったんだよ」
「あの時突然来なくなったでしょ？　その時、私はブエナ村から去ったの」
「じゃあ、魔術を教えてくれたのはこっちのサラで、裁縫を教えてくれたのは、向こうのサラ？」
「そう。……久し振りっ」
「久し振りだよぉ！」
胸に飛び込んできたシルフィを抱きとめ、その柔らかな感触に身を委ねる。
ああ、こんなに大きくなって。
今思えば、シルフィの事を子供だと思って見ていたのかもしれない。
一緒に居れた時間は少しだったけど、立派に成長してくれて凄く嬉しい。
肩に無意識に入っていた力が抜けた。
頭ではわかっていても、拒絶されるかもしれないと怖かったんだ。
ああ、良かった……。
暫くシルフィ成分を補充していると、咳払いが聞こえやむなく離れる。
「それでは、何かあれば私に言って下さい。できる限りは協力します」
「ええ、その時は宜しく頼むわ」
部屋を出ると、深く息を吐く。

――今日は、ぐっすり眠れそうだ。

私はスキップをし出しそうな足取りで、自室へ戻るのであった。